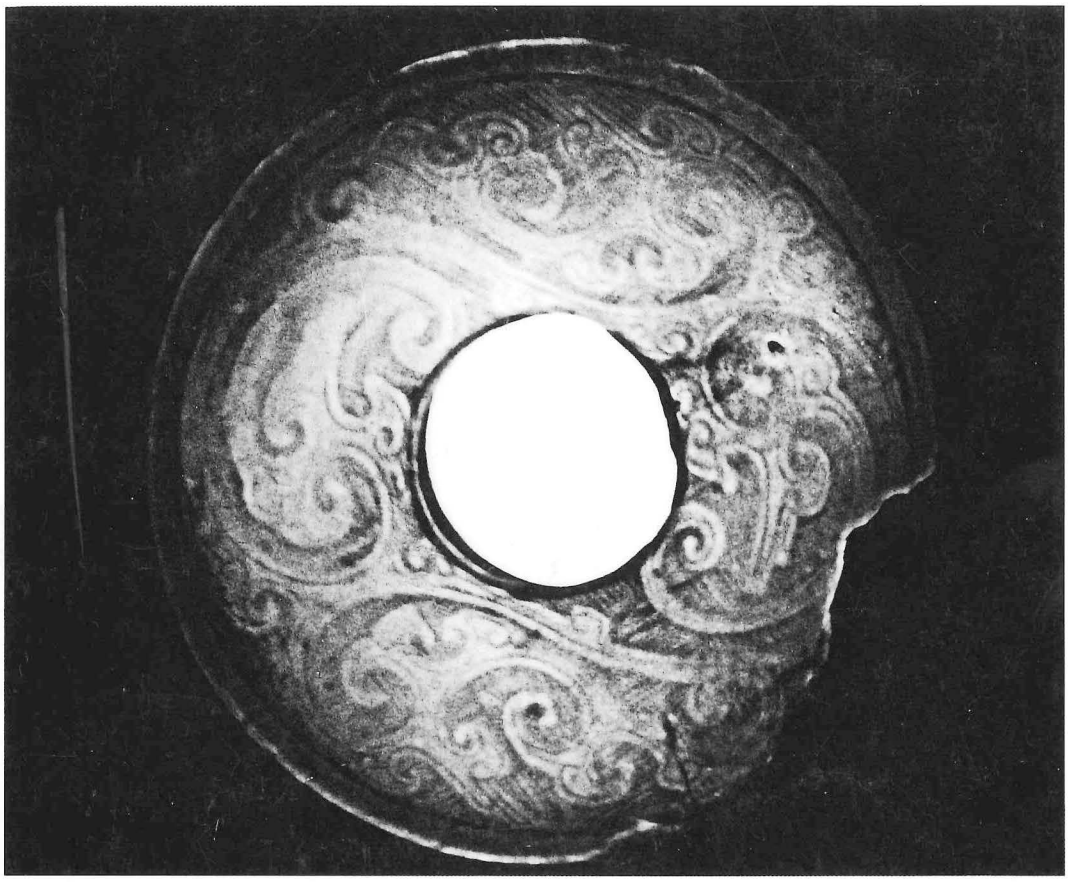
美津島町文化財調査報告書　第３集

かがり松鼻遺跡

――長崎県下県郡美津島町所在――



１９８８

美津島町教育委員会

発刊のことば

このたび昭和62年度事業として，昭和62年10月12日から10月20日にかけて発掘調査いたしました美津島町かがり松鼻遺跡の調査結果を報告書として発刊いたします。

日本一の大溺谷地形と言われる本町の浅茅湾，三浦湾一帯の海山の自然景観は他に比類なき絶景を誇る。

また，その一帯には数多くの遺跡が散在し貴重な文化財を蔵する歴史と文化財の宝庫である。この遺跡は昭和60年に県が実施した美津島町内遺跡調査の折に発見された半壊した箱式石棺の下部に青銅器が露出しそのまま放置すれば，自然崩壊し消滅する恐れがあったので遺物，石棺の保護を目的として実施したものである。

今回発掘調査の重責を負われ困難な状況を克服されて，ご尽力いただきました長崎県文化課主任文化財保護主事の高野晋司先生並びに文化財研究員の本田秀樹先生の協力により調査の所期の目的を達成しここに報告する運びになりましたことに対し，深甚の敬意と感謝を申し上げます。

この調査報告書が新しい文化を創造し発展させ文化財の保護と学術研究の資料としての一助になることを願うものであります。

昭和63年３月31日

美津島町教育長　川　本　初　實

例　　言

一　本書は昭和62年９月に実施した美津島町所在かがり松鼻遺跡の緊急発掘調査報告書である。

二　調査は美津島町の依頼を受けて長崎県文化課が実施した。

三　本書は分担執筆し，各項の執筆者は文末に記した。

四　遺物のＸ線写真は長崎記念病院，中村源之助技師・馬込万助技師によるが，撮影方法等については，長崎大学医学部附属病院斎藤匠司氏より玉稿を頂戴した。

五　本書関係遺物は，現在全て長崎県文化課が保管の任にあたっている。

六　本書の編集責任は高野にある。

本　文　目　次

一　調査経過……1

二　遺跡の地理的歴史的環境……2

三　遺構……9

四　出土遺物

①　変形細形銅剣……10

②　把頭飾……11

③　ガラス玉……11

④　土器……12

五　まとめ……17

六　美津島町かがり松鼻遺跡出土「把頭飾」のエックス線撮影について……30

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡周辺地形測量図……3

Fig. 2　かがり松鼻周辺遺跡図……5

Fig. 3　石棺実測図……7

Fig. 4　銅剣実測図……10

Fig. 5　把頭飾実測図……11

Fig. 6　ガラス玉実測図……12

Fig. 7　土器実測図　①……13
Fig. 8　土器実測図　②……14
Fig. 9　剣・把頭飾着装推定図……17
Fig. 10　各種把頭飾出土分布図……19
Fig. 11　国内出土「石製把頭飾」例……20
Fig. 12　対馬出土「銅製把頭飾」例……21
Fig. 13　中国出土「別鋳把頭飾」例……23
Fig. 14　文様がある把頭飾の例……24
Fig. 15　データ読みとり方法略図……30

表　目　次

Tab. 1　周辺遺跡地名表……6
Tab. 2　ガラス玉，径別数量表……18
Tab. 3　国内出土石製把頭飾地名表……29
Tab. 4　国内出土銅製把頭飾地名表……29
Tab. 5　朝鮮半島西・南部出土把頭飾出土地名表……29

図　版　目　次

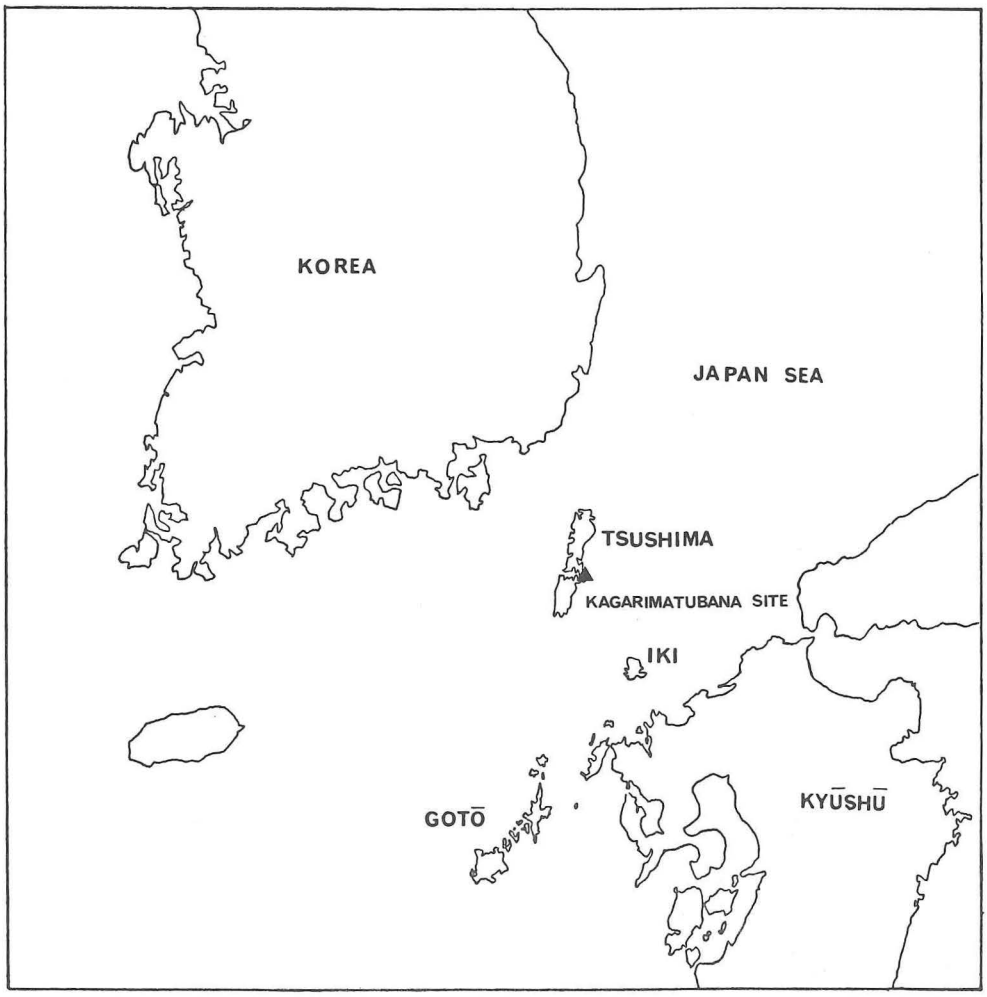
PL. 1　遺跡の東側三浦湾を臨む
PL. 2　変形細形銅剣
PL. 3　把頭飾
PL. 4　ガラス玉
PL. 5　機内よりみた浅茅湾
PL. 6　久須保浦より万関橋を臨む
PL. 7　X線写真
PL. 8　遺跡近景
PL. 9　露出していた細形銅剣（棺床下部より），調査風景
PL. 10　表土除去状況，棺床面露出状況

PL. 11　銅剣出土状況，把頭飾出土状況

PL. 12　出土土器①

PL. 13　出土土器②

PL. 14　出土土器③



遺跡位置図

一　調査経過

当遺跡は且つてより「かがり松鼻遺跡」として周知されていたが，昭和60年に県が実施した，県下遺跡周知事業に伴なう美津島町内分布調査の折り，半壊した箱式石棺の下部に青銅器が露出しているのが発見された。

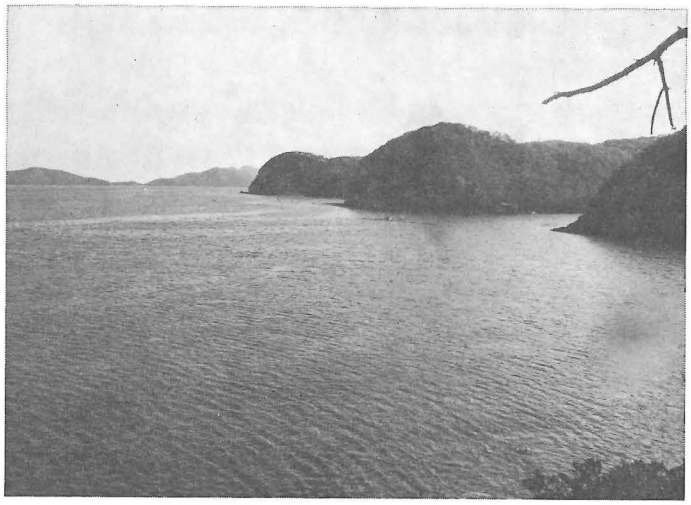
当該遺跡は美津島町のほぼ中央部，対馬を二分する万関橋の東，久須保浦に突き出た北面する岬上に位置する。海面との比高は５m程で，強い北風と波浪等による自然崩壊を受けており，このまま放置すれば遺物は勿論石棺そのものが消滅する恐れがあった。

このため美津島町と県文化課はその保護について協議を持ち，その結果石棺崩壊の前に発掘調査を実施することで合意した。

調査は昭和62年10月12日～10月20日まで実施した。調査関係者は以下の通りである。

美津島町教育委員会	教　育　長	川本　初實
〃	社会教育課長	斉藤　安彦
〃	指導係長	吉野　　哲
〃	主　　査	豊島美代子
〃	中央公民館館長	辻田　　謙
長崎県教育庁文化課	主任文化財保護主事	高野　晋司
〃	文化財研究員	本田　秀樹

（高野）



ＰＬ.１　遺跡の東側三浦湾を臨む

二　遺跡の地理的歴史的環境

壱岐と共に九州と朝鮮半島との間に飛び石状に展開する対馬は南北82km，東西18km，面積710km²[註1]を有し，我国の島嶼では佐渡・奄美大島に次ぐ。

対馬全島は対州層群と呼ばれる新世代第3紀の頁岩と砂岩の互層から成る[註2]が，島の大部分は嶮阻な山地に覆われ，その末端は急角度を為して海岸に没する。為に平地や流域をうるおす河川も殆ど無く，全体として荒々しい景観を呈する。又，至る所リアス式海岸が顕著であり，特に中央部に在って島を分断させ，朝鮮海峡に向って咆哮するが如き姿の浅茅湾はその極致であり，地形的な美しさはもとより夕映えの島影と波嫋やかなたたずまいの中に，南北に市羅しながら飽く事なく西からの文物を求め続けた対馬海人の姿を彷彿とさせる。

周辺の遺跡を概観してみよう。(Fig. 2)

概して対馬に於ける縄文時代遺跡は稀薄であるが，該地附近でも24で1ケ所知られているにすぎない。標高10m，海辺に面した狭隘な低平地に立地するが，数点の黒曜石剝片や石鏃が散見される程度で，遺跡の内容は不明である。

浅茅湾に突出した，……崎とか……鼻とか呼ばれる小さな岬の先端などに，箱式石棺を主体とする墳墓が多く存している事はよく知られている。殆どが弥生時代中期以降の所産であるが，以降古墳時代まで継続して同地に築かれる事が多い。只，全ての岬が墓地として選定される訳ではなく，限定された地（岬）がそれぞれ一つの最小の単位として近親者等の代々の墓地として利用された感が強い。

対馬の弥生時代に於ける青銅器の分布と共伴する土器型式の変遷からみた社会の動向については，その中心が，北部三根地区から，豊玉町仁位・佐保地区，そして仁位地区へと南下した状況が指摘されている[註3]。その中にあって，これまで浅茅湾南岸には有力な弥生遺跡が知られていなかったが，今回のかがり松鼻遺跡の調査によって，該地区にも地域社会（浦集団）の長ともいうべき遺跡の存在が明らかになった。

先述した如く，基本的に古墳時代の墳墓の多くも又立地，形態共に弥生時代のそれを踏襲しているが，只，幾つかの大きな変化が見られる。すなわち，33～42の遺跡が集中する雞知地区の存在である。封土を持たない事が多い対馬の古墳の中にあって，該地区には9基の高塚古墳が集中し，その中には4基の前方後円墳が含まれる。

まず，33の鶴の山古墳は前方部長さ23m，高さ1m，後円部直径が17m，高さ4mを計る。主体部は大部分欠失しているが，立地や，古墳の形式そして出土した有茎柳葉式の銅鏃から前期古墳と推定されている。同時にこれは対馬で最も古い高塚古墳に相当する。続いて37の根曽1号墳，40根曽4号墳，39根曽2号墳，そして横穴式石室を主体とする38根曽3号墳と歴代対馬首長の墓に比定される高塚古墳が群集する。弥生後期後葉～終末期には瀬戸内系の土器といえる細頸壺が多くみられる事から，すでにこの時期には畿内勢力が北九州を圧倒しているとい

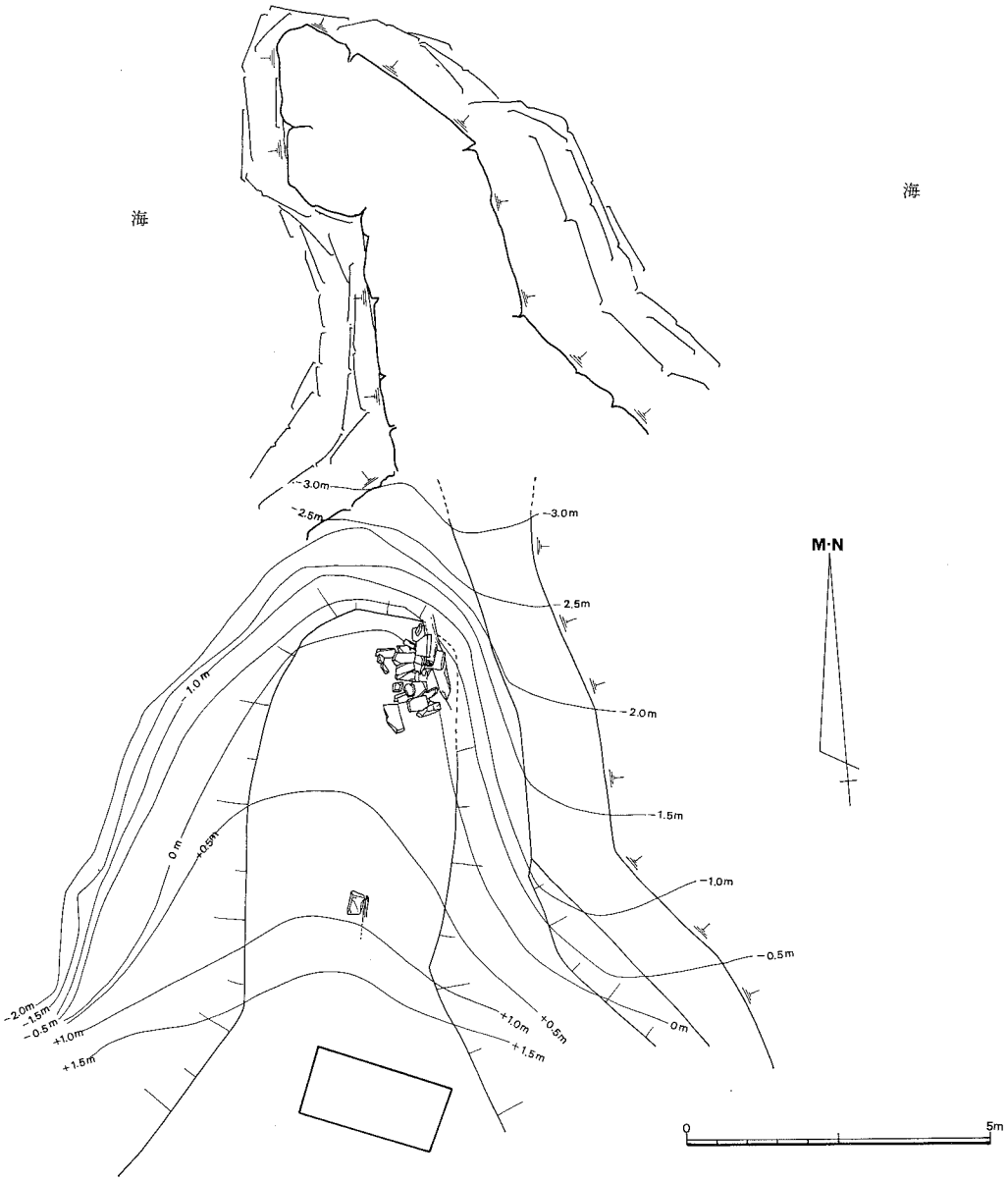


Fig. 1　遺跡周辺地形測量図

う状況が指摘されているが[註5]，その延長として，それまで政治的，経済的にも北部九州の影響下にあった対馬が4世紀代には完全に大和政権の支配下に属していることを示している。

対馬には中世の墳墓も又多い。

1471年朝鮮申叔舟によって撰進された「海東諸国紀」によると，当時の対馬の戸数は8郡82浦8,460戸あったとされる。

この内美津島町は旧与良郡に属し，20浦2,600戸であったらしい[註6]。対馬島内に於ける人口比は約30%であるが，現在は16%まで減じている。

一方，遺跡が立地する久須保浦は前掲書では仇愁音夫浦，戸数は20余戸と記されている。明治初年の調べでは当該地は本戸24戸とあり[註7]400年間ほぼ同水準で移行している。『魏志倭人伝』に言う対馬全体を表現した「……良田無く海物ヲ食シテ自活シ，船ニ乗リテ南北ニ市糴ス」の記述と「土硝セ，民貧シク煮塩，捕魚販売ヲ以て生トナス[註8]」の内容は，弥生の往古より今に至るまで連綿と生きつづけ基本的には何ら変わらない。只，現在の久須保浦は，明治33年旧日本軍による万関瀬戸の開削以来漁業基地として地の利を得た為に，77戸351人まで増えている。

（高野）

註1　対馬自治連絡協議会「つしま百科」1967　55頁
註2　註1文献
註3　高倉洋彰「弥生時代の対馬とその社会」えとのす30　新日本教育図書㈱　1986　45～53頁
註4　九学会連合対馬共同調査会「対馬の自然と文化」1954　271～276頁
註5　橋口達也『対馬における弥生式土器の変遷』「対馬」長崎県文化財調査報告書　第17集　1974　410頁
註6　美津島町役場「美津島町誌」1978　99～101頁
註7　上掲書
註8　上掲書

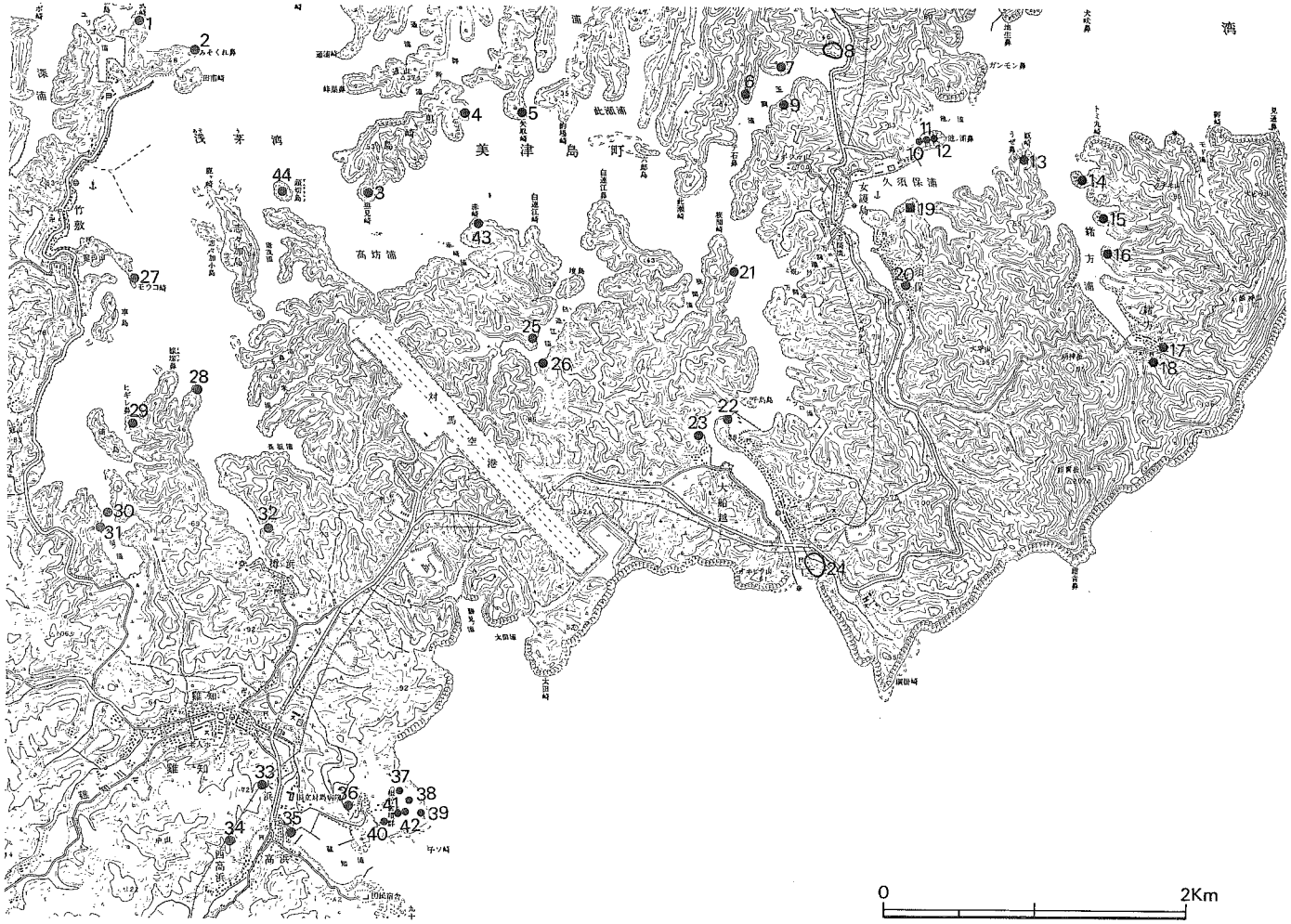


Fig. 2　かがり松鼻周辺遺跡図

Tab. 1　周辺遺跡地名表

地図No.	遺跡名	種別	立地	時代	備考
1	小式崎遺跡	墳墓	岬	弥・古	箱式石棺
2	みそくれ鼻遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺1～2基
3	黒見崎第2遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺
4	黒見崎第1遺跡	〃	〃	〃	〃
5	矢取崎遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺1基・積石塚1基
6	玉調第4遺跡	〃	丘陵	〃	箱式石棺7～8基
7	玉調第2遺跡	〃	岬	〃	箱式石棺1基
8	玉調浦遺跡	〃	〃	古墳	
9	玉調第3遺跡	〃	〃	弥・古	箱式石棺6～7基
10	池ノ浦鼻2号墳	古墳	〃	古墳	
11	池ノ浦鼻1号墳	〃	〃	〃	
12	池ノ浦鼻遺跡	墳墓	〃	弥・古	
13	甑崎遺跡	〃	〃	〃	
14	緒方浦第3遺跡	〃	〃	〃	
15	緒方浦第2遺跡	〃	〃	〃	
16	緒方浦第1遺跡	〃	〃	〃	
17	久須原遺跡	遺物包含地	平地	中世	
18	姫神社遺跡	墳墓	台地	弥・古	箱式石棺10数基
19	かがり松鼻遺跡	〃	岬	〃	
20	久須保遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺2～3基
21	狭間崎南遺跡	〃	〃	〃	
22	菜畑南遺跡	〃	〃	〃	
23	船越対岸遺跡	〃	〃	〃	
24	大船越遺跡	遺物包含地	平地	縄文	
25	白連江第1遺跡	墳墓	岬	縄・古	箱式石棺6基
26	白連江浦西遺跡	〃	〃	弥・古	箱式石棺3～4基
27	モウコ崎遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺数基
28	一本松遺跡	〃	丘陵	〃	〃
29	ヒギレ鼻遺跡	〃	岬	〃	
30	久須ノ浦第2遺跡	〃	〃	古墳	箱式石棺数基
31	久須ノ浦第1遺跡	〃	〃	〃	箱式石棺1基
32	樽ケ浜遺跡	〃	〃	弥・古	〃
33	鶴の山古墳	古墳	丘陵	古墳	前方後円墳
34	サイノヤマ古墳	〃	台地	〃	横穴式石室
35	高浜ヒナタ遺跡	遺物包含地	平地	〃	
36	根曽西遺跡	墳墓	台地	〃	
37	根曽一号墳	古墳	丘陵	〃	37～41国指定根曽古墳群
38	根曽三号墳	〃	〃	〃	〃
39	根曽二号墳	〃	〃	〃	〃
40	根曽四号墳	〃	〃	〃	〃
41	根曽五号墳	〃	〃	〃	〃
42	根曽六号墳	〃	〃	〃	
43	白連江赤崎遺跡	墳墓	岬	弥・古	
44	頭切島遺跡	〃	島の頂	〃	

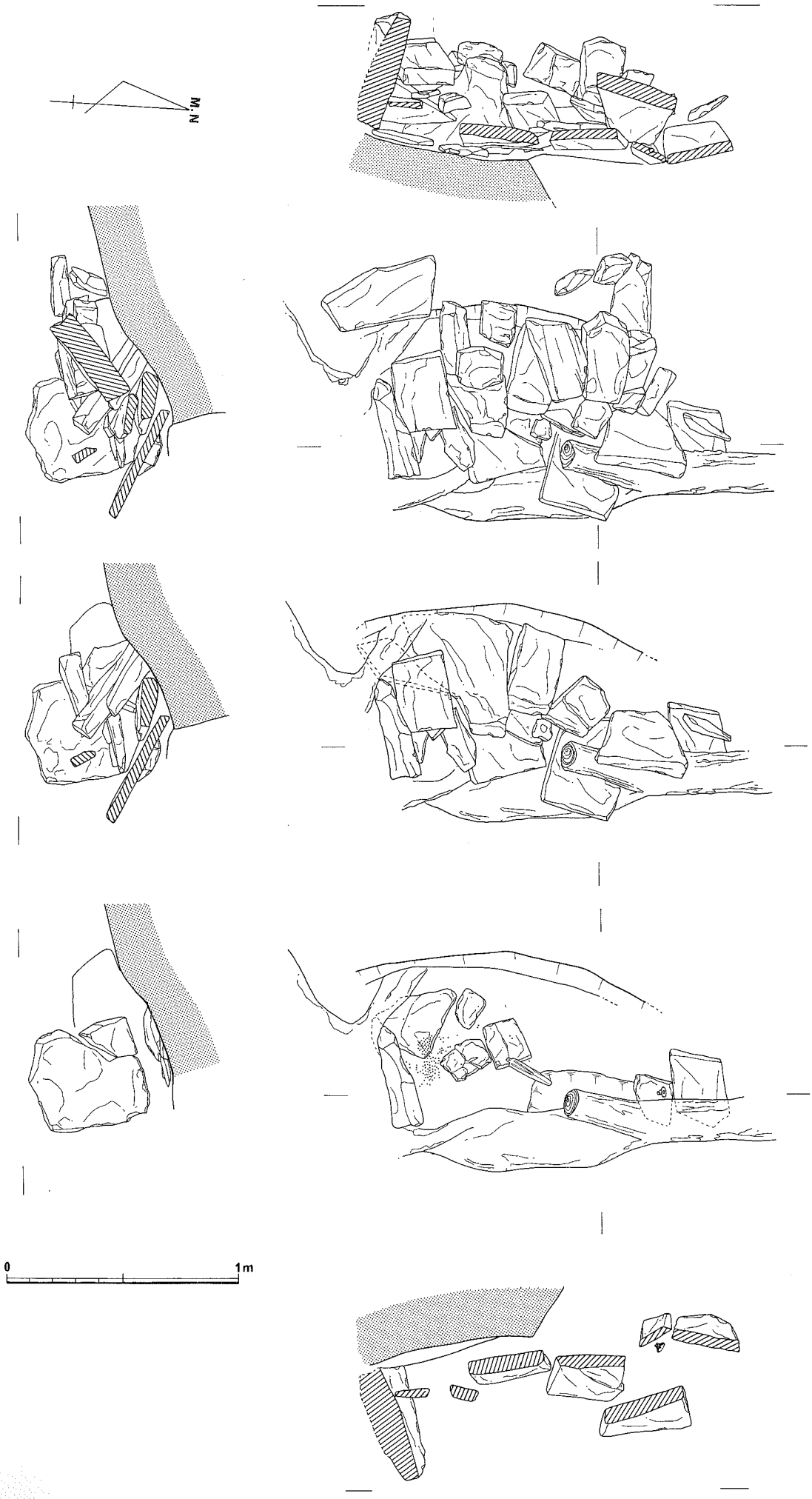


Fig.3 石棺実測図

三　遺　構 (Fig. 3)

石棺は通路拡幅と松の根の侵食とによって原形が大きく損なわれていた。特に東側部分は通路拡幅後の地山の崩れによってオーバーハング状を呈しており，棺床の一部が下からのぞける状況であった。棺内副葬品もいわば落下寸前の状態であったといって過言ではない。

この遺跡については，以前より周知されていた事は前段の項でも述べたが，1968年長崎県と九州大学による浅茅湾沿岸遺跡緊急調査の一環で，小田富士雄氏等も現地踏査をされており，その折棺内より弥生後期前半の壷の破片を採集した旨の記載がある。[註1]

半ば崩壊した石棺は全体的に東側へ大きく傾いており，北側木口壁はすでに消失していた。側壁も残存している分では東側で２枚，西側４枚であるが，残存位置から推定すると当初はそれぞれ５～６枚程あったものと思われる。

棺床には板状礫による敷石が認められるが，やはり数枚は既に無い。蓋石についても同様で，それらしき板状石は周辺に認められるが全て動かされている。なお，棺材には周辺に豊富に産する泥岩と砂岩の板状石が利用されている。

全体的な形状が定かでないため，石棺の方量は不明瞭であるが，凡そ内径は150cm×40cmである。なお，棺内南側に集中するガラス玉の位置から推定すると南枕の可能性が高い。

副葬品は，後述する如くガラス玉約1,200個，変形細型銅剣１，把頭飾１，土器片数十個である。

銅剣は棺の東側中程に鋒を北にむけて置かれ，把頭飾は棺の北側，位置的には足元の方に在った。当初は銅剣とセットの関係にあったものが，その後の撹乱により移動したものか，当初よりその状態であったものか不明である。

註１　長崎県教育委員会「対馬」長崎県文化財調査報告書　第17集　1974

四　出土遺物

① 変形細型銅剣 (Fig.4, PL. 2)

鋒部を欠損する。現存長22cm，最大幅35mm，最大厚7mmを測るが，推定復元長は27cm程度と思われる。刳方は無く，樋が関部末端まで及ぶいわゆる変形細型銅剣のタイプに属する。鎬は全体的に扁平で不明瞭である。関部は断面長方形で中心部に径7mmの目釘穴を1個有する。銅質は良くない。

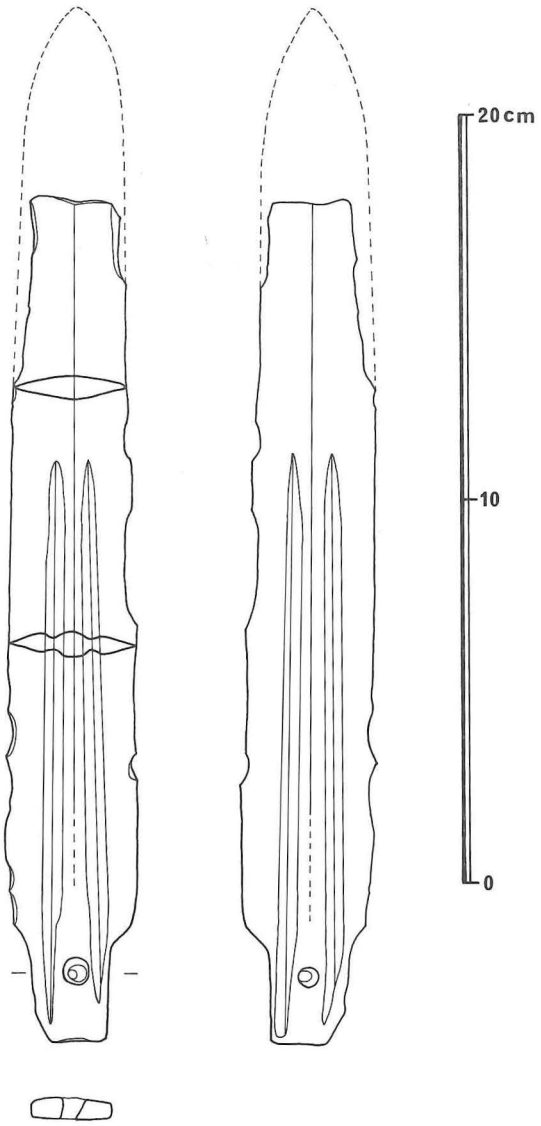
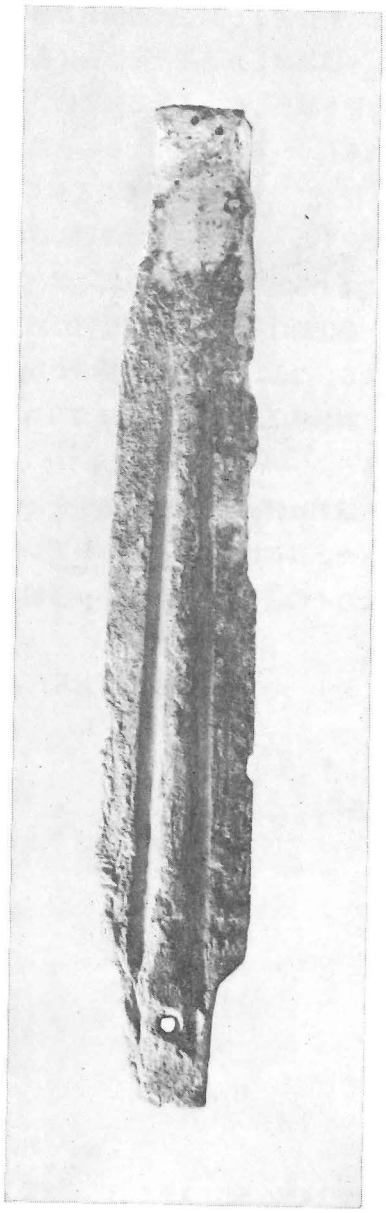


Fig.4　銅剣実測図



PL.2　変形細形銅剣

② 把頭飾 (Fig. 5, PL. 3)

銅製。径5㎝，高さ2.65㎝，重さ50ｇを測る。側面が帽子状をなし，剣把を挟んで装着するための2個の突起と，径2～4㎜の孔がそれぞれ穿たれている。ラッパ状に拡がる笠部の内側には中心部に丸い小突起が見られ，その周りに浮彫の流麗な流雲形花紋を施す。

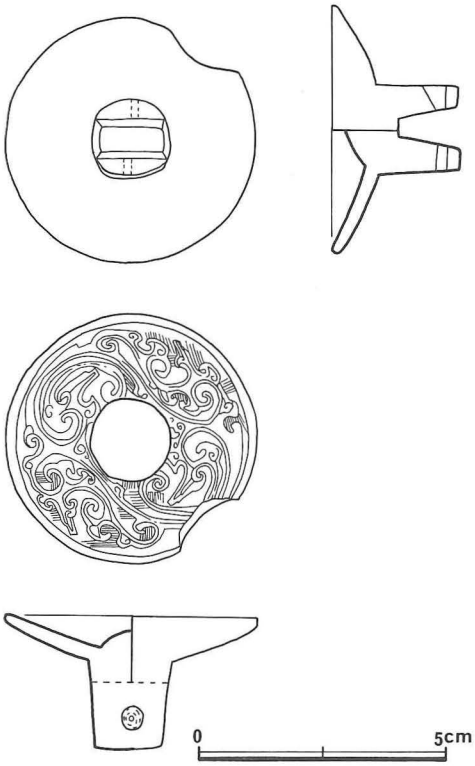
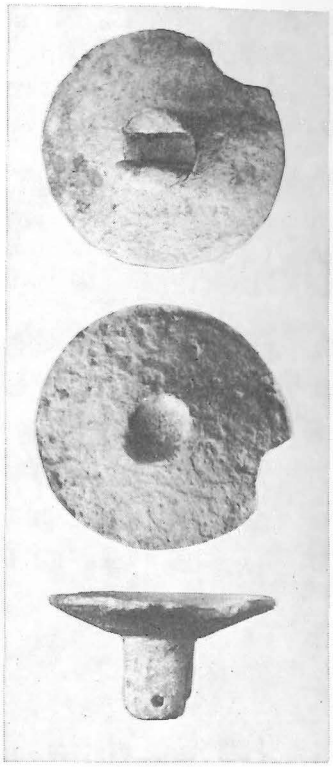


Fig. 5 把頭飾実測図



PL. 3 把頭飾

③ ガラス玉 (Fig. 6, PL. 4)

出土したガラス玉は，基本的な色調として青，紺，緑，白色の4種に分けられる。更にそれぞれを径別にしたのが Tab. 2 である。

総数約1,200個，全てを一連にして繋ぐと252㎝の長さとなる。

ガラスの玉は，棺の南側の方に集中的に置かれており，恐らく二重及至三重にして首からかけられていたものと推察される。 (高野)

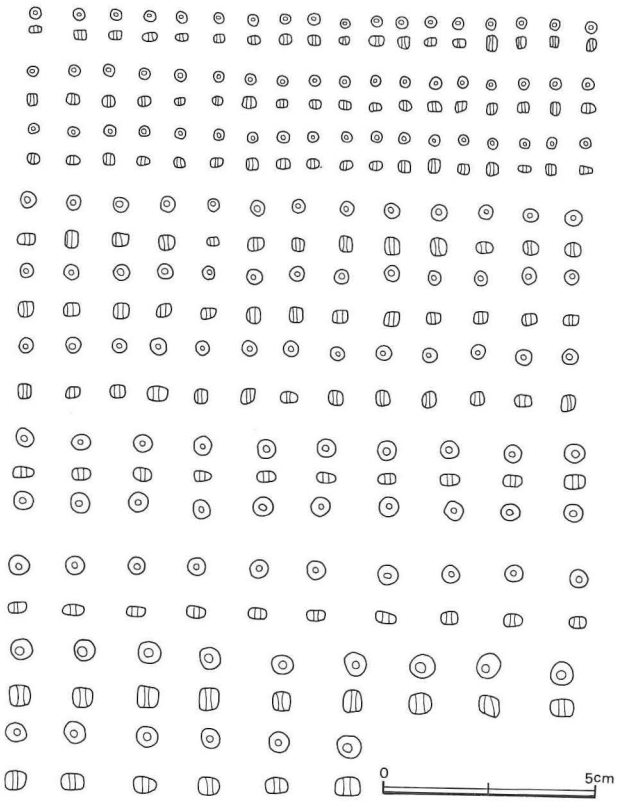
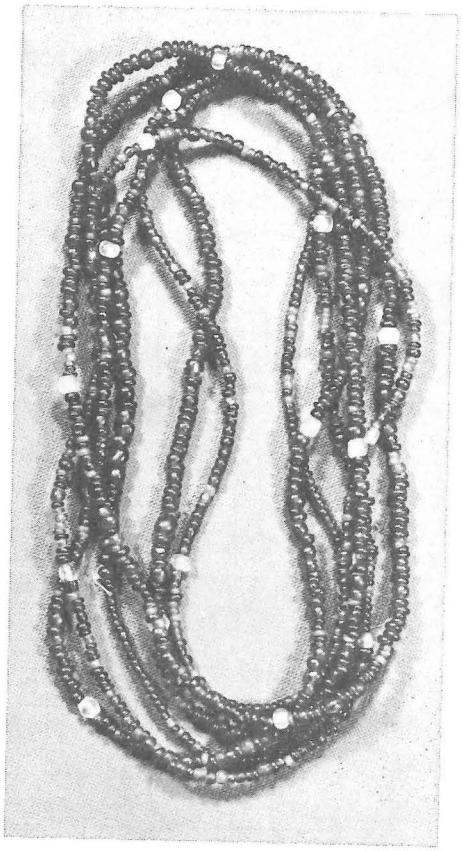


Fig. 6　ガラス玉実測図



PL. 4　ガラス玉

四　土器 (Fig. 7·8, PL. 12·13·14)

遺物は弥生土器・土師器・須恵器とに分けられる。このうち棺内出土は弥生土器片数点のみで，あとはいずれも石棺周辺出土である。以下，順を追って説明していきたい。なお，土器拓本は左に裏面，右に表面を配置した。

弥生土器（1）　弥生土器は同一個体の三片が出土したが，小片のため図示できたのは一点しかない。1は壷の底部片である。底部は平底にちかく，そこから外へ開き気味に立ち上がる。最下部は風化のためか，やや緩い稜線を残す。胎土には1～2㎜大の石英が顕著に見られ良質とは言えない。調整はナデかと思われる。1968年，小田富士雄氏等の一行が当遺跡を踏査した際，棺内から弥生後期前半頃の壷肩部片を発見しているが(註1)，この土器はその一部かと考えられよう。

土師器（2～5）　2は甕の口縁部である。緩やかに外反するくの字形口縁をなす。口縁部外面付け根付近には，沈線状の稜をもつ。口縁部内面の稜は鈍く，以下へラケズリかと思われ

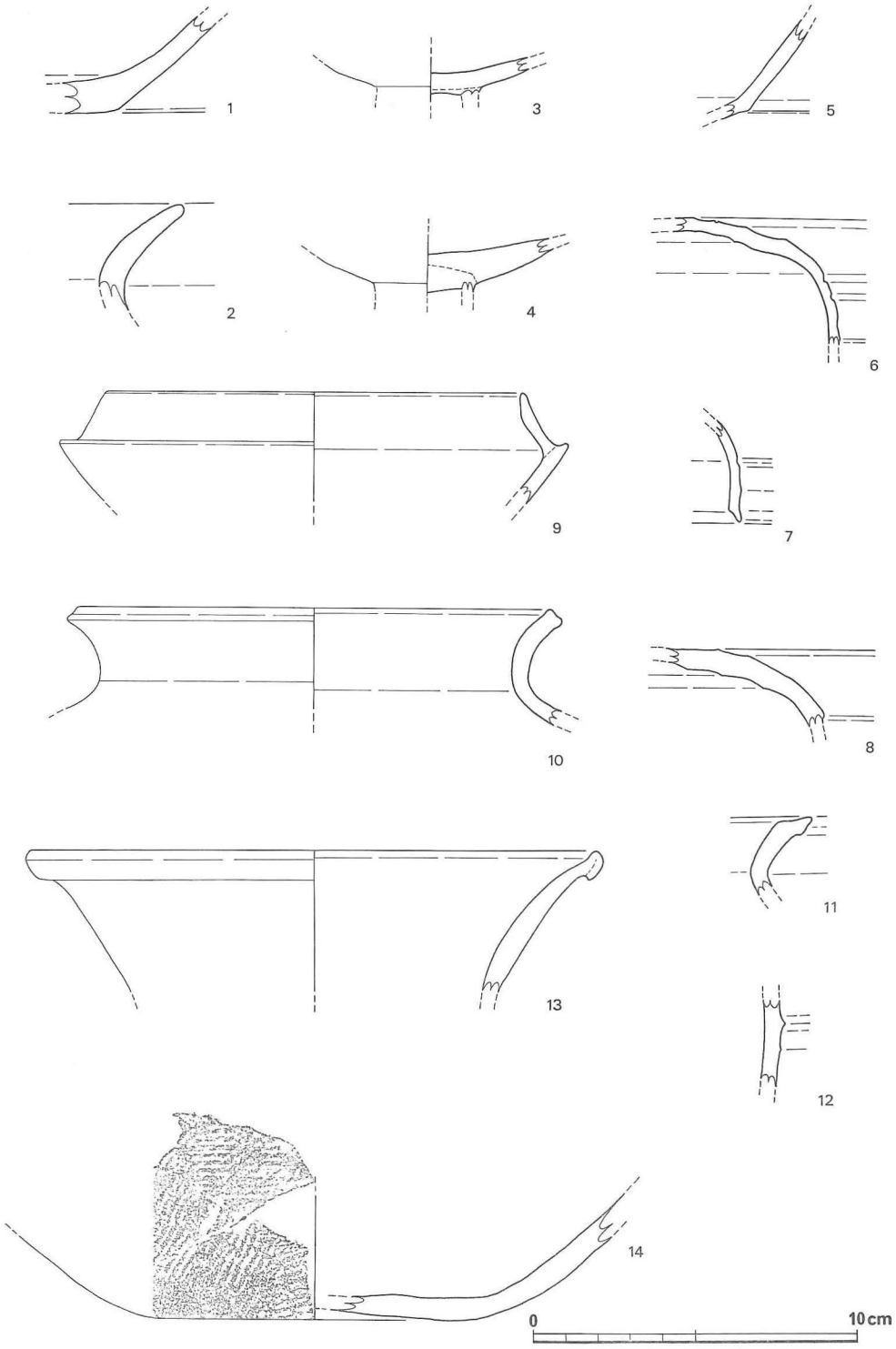


Fig. 7　土器実測図①

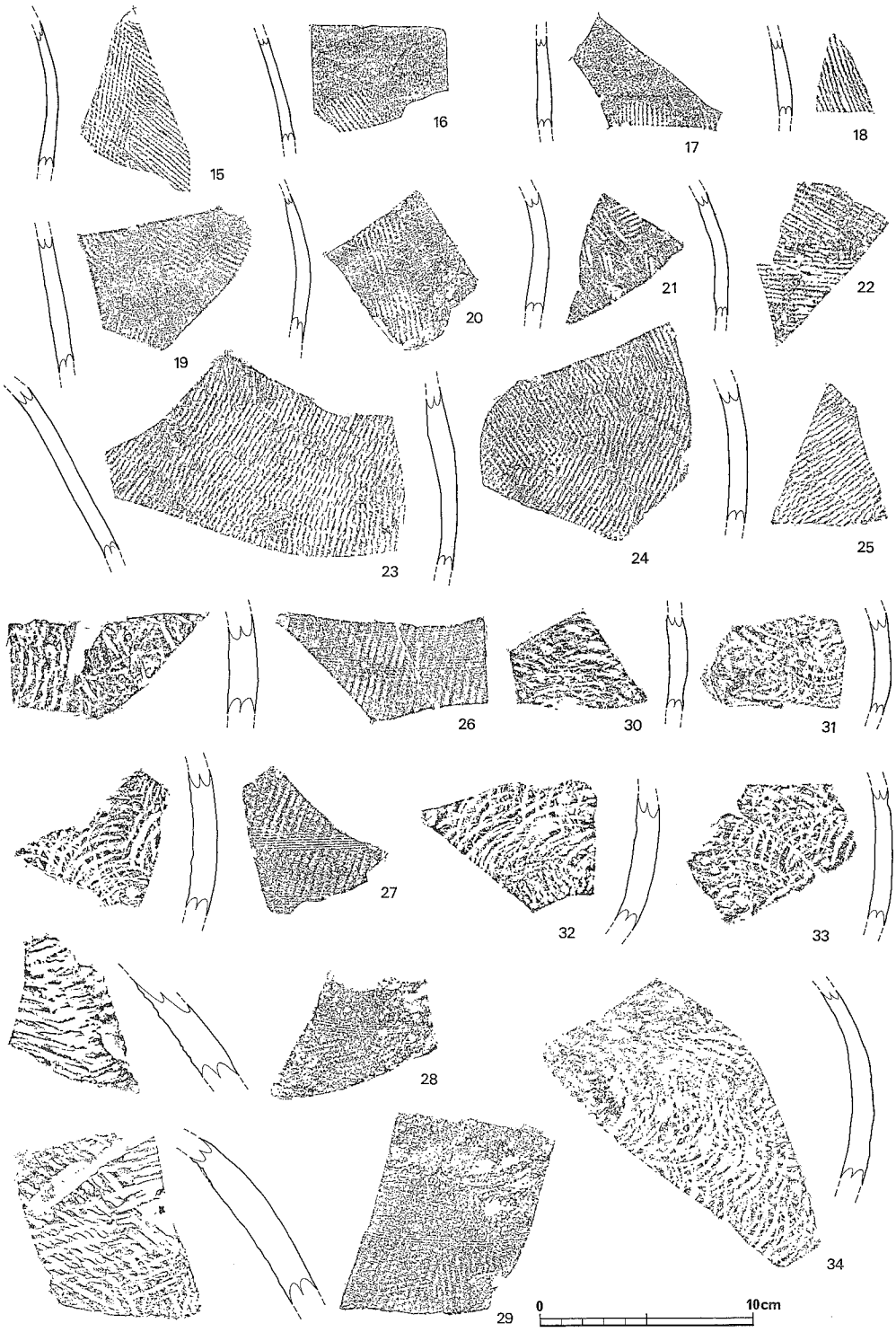


Fig. 8　土器実測図②

る。胎土は 3～4㎜大の石英が目立ち，1と同様にあまりよくない。3・4・5は高杯である。3・4の坏底部は浅く，屈曲部まではやや丸味をもって内弯気味に開く。胎土・焼成は共に良好。5は坏体部の屈曲部分である。屈折の稜は明瞭で，口縁部にかけてほぼ直線的にのびる。胎土・色調・焼成等から考えて，4と同一個体になる可能性がある。

須恵器（6～34） 6・7・8は坏蓋である。6の天井部は幾分丸味を帯び，口縁部まではほぼ垂直に下る。外面は2/3程まで回転ヘラケズリを加える。口縁部を画する稜は形骸化し，むしろ沈線状の段になっている。7の口縁部は端部が嘴状を呈し，割と鋭い。口縁内側は内傾する凹面を有するが，稜は鈍い。6・7は共に胎土に石英・長石等の細粒を含み，焼成は良好。同一個体と考えられる。8の天井部は丸味をもち，口縁に移行する部分では短く鈍い段をなす。天井部外面の2/3程は回転ヘラケズリ調整。内面は一部にナデを加える。9は坏身の口縁部である。全体に丸味を帯び，鋭さは感じられない。底部から内弯しつつ受部へ移行する。受部は短く水平にのびる。たちあがりは外反気味に内傾し，端部は丸くおさめる。10・11は短頸壷の口縁部である。10は頸部から口縁部へ大きくカーブを描いて外反する。口縁外端面は水平方向に，内端面は上方にややつまみ出される。全体の作りは非常に丁寧で胎土は精良，焼成も堅緻である。内，断面の色調はあずき色を呈す。陶質土器であろう。(註2) 11は短く屈曲する頸部に，外反してのびる口縁がつく。端部はさらに上外方へつまみ出され，内面は凹面をなす。胎土は良質，焼成はやや甘い。12は長頸壷の頸部片であろう。外面にはつまみ出された1条の突帯が巡る。作りは丁寧で，陶質土器である可能性が高い。13は甕の口縁部である。外反して大きく開く口縁部は，端部で折り曲げられ肥厚し玉縁状を呈する。先端は丸くおさめられ，内面で僅かに凹面を形成する。調整は内外面とも横ナデ。胎土は良好だが焼成は甘く，するどさに欠く。生焼きのようにも思われる。陶質土器の可能性も考えられよう。14は甕の底部である。底部はやや窪み，そこから緩やかに外へ開いてのびる。外面は平行タタキの後ナデ消し，内面は指でナデる。胎土・焼成等13に似る。15・16・17・18は10と同一個体と思われる胴部片である。肩部に近い部分は調整不明。以下は縄席文を有する。内面には水引き痕を明瞭に残す。色調はあずき色を呈し，焼成は良好，緻密で堅い。19・20・21は14と同一個体の胴部片である。外面は平行タタキをナデ消し，内面はナデて調整する。いくらか歪みがあるようだ。22は外面を細い平行タタキ，内面はタタキをナデ消す。胎土は良好，焼成はやや甘い。23・24・25も同一個体である。外面は平行タタキ，内面は下から上へナデ上げ，そのあと上部を横ナデ。調整法からみて肩部～胴部にかけての部位と思われる。胎土・焼成共に良好。26～34は全て同一個体の胴部片だが，26～29は30～34よりも上位の部分であろう。26～29は外面タタキの後カキ目を施す。30～34は外面での風化・剝落が著しく調整不明。内面は同心円タタキが残る。いずれも胎土は良好だが，30～34の焼成はやや甘い。

以上みてきたように，今回の調査で出土した遺物は弥生時代後期～古墳時代後期と数世紀にわたる。また朝鮮半島の製品も混ざっており，このことは当遺跡の地理的・歴史的な広がりを示唆するものといえよう。直接，石棺と結びつく遺物は数片の弥生土器しかないが，この他にも周辺には時代の異なる遺構が存在することを裏付ける資料を得ることができたことは意義深い。

（本田）

註1　小田富士雄他「対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―」1974
註2　長崎県文化課　藤田和裕氏より御教示

PL.5　機内よりみた浅茅湾

五　まとめ

半壊した僅か一基だけの石棺の調査であったが，変形細形銅剣，把頭飾，ガラス玉の副葬品が残存するなど，大きな成果を得ることができた。

以下，今一度遺物の在り方，その持つ意味等について，若干のまとめをしておきたい。

遺物の出土状況から考えてみたい。遺構の項で記した如く，ガラス玉の位置から被葬者は南枕であったと考えられるが，そうであれば，銅剣は被葬者の右腰あたりに埋置された可能性が高い。ここで理解に苦しむのは 把頭飾の位置である。銅剣は 鋒を北に向けて置かれてあったが，把頭飾は更にその45cm北側，位置的には石棺東北隅あたり，更に言えば被葬者の膝から踝あたりに，半ば立った状態で発見された。

出土時には，銅剣との位置関係，類例をみない特異な形態から把頭飾であるとの認識は持てず，異形青銅器の一種であろうと判断していた。

それはともかく，半ば立った状態というのは，遺物の形態が円形であることを考慮に入れると元の位置から転った結果を示すものと容易に推察される。しかも，松の根による侵食と通路拡幅時の掘削による要因を考え合わせると，恐らくその撹乱時に原位置を移動したものであろうとの推論が考えられる。この場合，残存しない剣柄は木製であり，もともと銅剣＋剣柄＋把頭飾が一体となって着装されていたと想定するのが前提となる。(Fig. 9)

一方，剣と把頭飾は別々に埋納されていたという推論も成立する。

棺床面はほぼ平担であり，多少の撹乱があったとしても，本来銅剣の南側にあるべきはずの把頭飾が銅剣を乗り越えて，更に45cmも移動することに不自然さが残るからである。

対馬出土の細形銅剣と剣付属金具の間には，豊玉町シゲノダン遺跡，峰町木坂７号石棺の場合から，本来着装された状態で埋納されたとは認め難いとの指摘[註1]もあり，その論に従うと銅剣と把頭飾は当初より別々に埋納されていた可能性も否定できない事になる。類例の無い形態が把頭飾であるとの認識に繋がらなかった可能性もあろう。

石棺自体相当な損壊を受けており，出土遺物にも十分移動が考えられる状況がある為，ここでは断定を避けて，双方のとらえ方がある事のみ述べておきたい。

次に出土遺物についてふれておく。

まず，ガラス玉であるが，前項で述べた如く，数量的には約 1,200個程が出土した。この内，数百個分のドットマップの結果，それらの出土

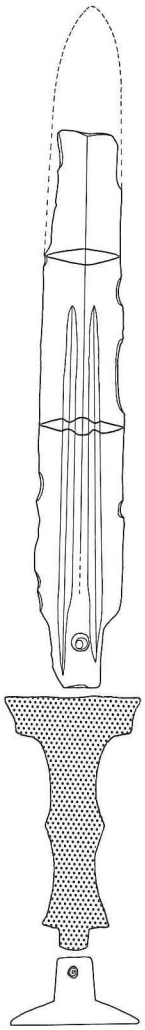


Fig. 9　剣・把頭飾着装推定図（アミ目は推定剣柄）

位置は，石棺の南側中央部分に集中しており，一部が銅剣茎近くまで及んでいる。(Fig. 3)

この状況からすると，ガラス玉は一連に繋がれた上で二重乃至三重にして被葬者にかけられ，その一部の先端が腰付近までかかっていたものと推察される。

ガラス玉は，現在本県には弥生時代に属するものとしては，21遺跡[註2]38例が知られているが，この内対馬出土が14遺跡24例を占める。時期的には，壱岐原ノ辻大原2号甕棺内の中期初頭を初源とし，以後終末まで継続するが，対馬出土のものは，その殆どが後期前半以降に集中している。

弥生時代のガラス玉は，小玉と呼ばれる径2～4㎜程度のものが最も多く，時代が下るにつれて大きくなる傾向を持つ。

埋納される数量は，弥生中期の段階では1～3個程度であるが，後期になると長崎県塔ノ首2号（後期前半約8,000個），福岡県門田13号土壙（後期前半約800個），福岡市宝満尾15号土壙（後期前半536個），佐賀県二塚山22号土壙（後期中頃3,573個），長崎県中野ノ辻5号石棺（後期後半346個）等，後期前半～後半にかけて集中的に埋納される例が多くなる。国産化が始まった現象と解されよう。

Tab. 2 ガラス玉径別数量表

	青	紺	緑青	白(灰白)
大 5㎜～		52		12
中 4～4.9㎜	1	348		5
小 3～3.9㎜	166	496	1	
極少 2.9㎜以下	16	98		
計	183	994	1	17

色調的には各時期を通じ圧倒的に青・紺系統が多く，稀に白色や，紫色のものが散見される程度である。

かがり松鼻石棺出土のガラス玉の場合，数量的に約1,200個，径2～5㎜のものが95%を占める。色調的にはその殆どが青，紺系統であり，弥生時代後期前半に於ける各地遺跡の特徴と矛盾しない。(Tab. 2)

変形細形銅剣は，これまで対馬では佐護白岳[註3]，吉田恵比須山[註4]，佐保シゲノダン[註5]，仁位東ノ浜[註6]で出土しており，金海出土[註7]の2例を合わせ6例が知られていたが，今回のものを合わせて計7例となった。

これらの銅剣の特徴は，細形銅剣に通有な刳方が無く，且つ銅質が悪い。これらの銅剣については，その出土が対馬に集中することから対馬産と推定された事があるが[註8]，対馬で鋳造される必然性も無い事等による理由から，やはり韓国南岸の金海附近で儀器として製作された可能性が強いとされている[註9]。朝鮮半島に於ける類例の増加が待たれる。

最後に把頭飾について触れておきたい。

現在我国で知られる把頭飾は大きく三種に区別される。㈠は石製把頭飾で長崎県，佐賀県，福岡県，山口県等，朝鮮半島に対峙する地域に９遺跡９例。㈡は銅製把頭飾で本遺跡分を含めて，対馬で９遺跡12例，福岡市で３遺跡３例，合わせて12遺跡15例となる。㈢は剣，剣柄，把頭飾が同鋳された例で，福岡県三雲[註10]，佐賀県柏崎[註11]，山口県向津具[註12]の３例である。

これらはその殆どが朝鮮半島に祖型が求められるもので，以下種類別に例をみてみよう。

まず石製把頭飾は，朝鮮半島では18例[註13]以上が知られている。(Fig. 10, Tab. 5)

岡内氏は，銅製を含む把頭飾について，まず着装する銅剣を大きく遼寧式系統とオルドス系統のものを区別した上で，前者に伴う把頭飾を４種（ＡⅠ・枕形，ＡⅡ・十字形，ＡⅢ・十字形の中央に方柱状の突起をもつもの，ＡⅣ・ＡⅢタイプの両端に動物意匠を施すもの）に分け，後者に伴うものを２種（ＢⅠ・従来触角式把頭飾と呼称しているもので，把頭飾から鐔ま

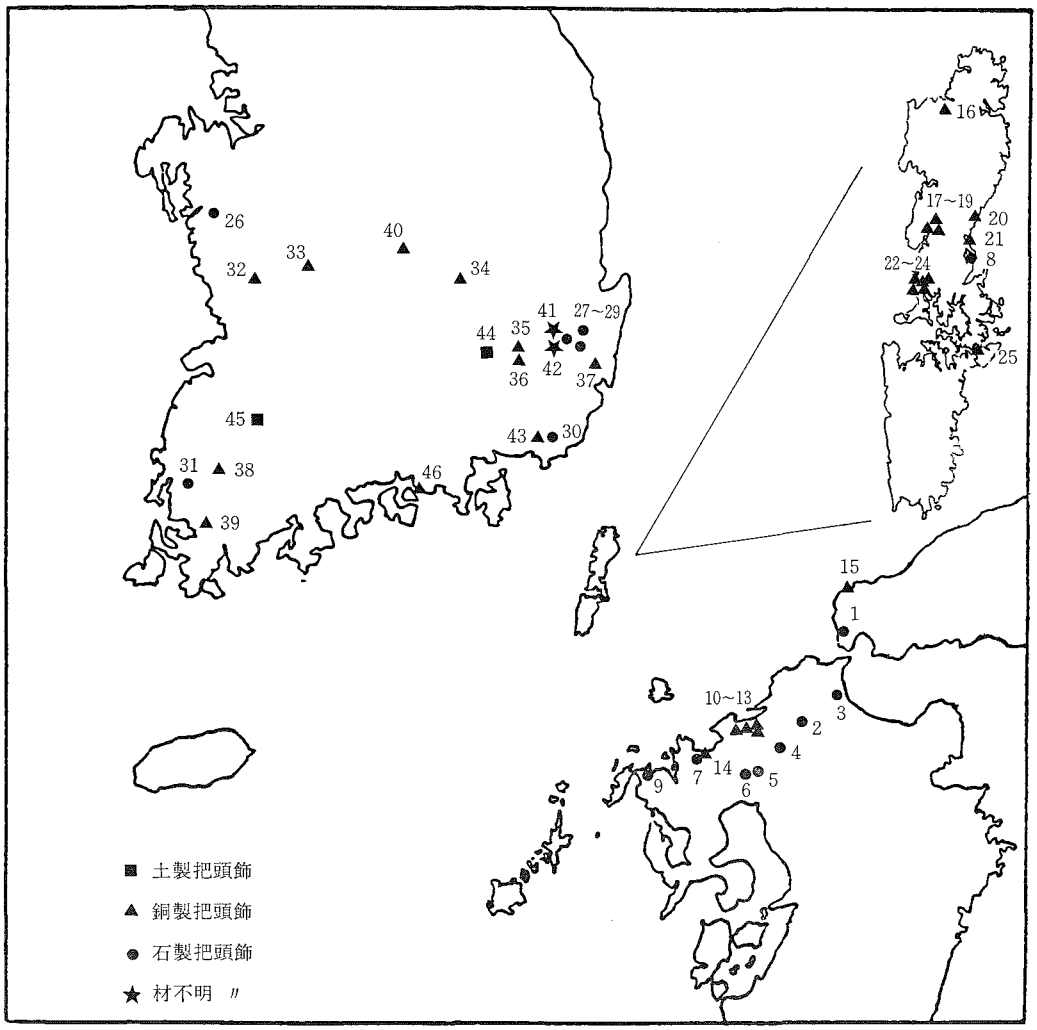


Fig. 10　各種把頭飾出土分布図

でを同鋳にしたもの，BⅡ・把頭飾と把握部の分かれた分離式）の6種に分類された。この内AⅠ型のみが石製で，AⅡ型は石製と銅製・AⅢ型は石製，銅製，土製，AⅣ型は銅製のみであり，B型は何れも銅製とされる。[註14]

本来把頭飾と呼ばれるものは，中国東方地方を中心として西周中晩期～戦国中晩期にかけて流布した遼寧式銅剣に伴うT字形剣柄端につけられた加重器と呼称される石製の付属物で，本来装飾的な意味よりバランスを取る為の機能を持つものとされる。[註15]その意味から言うと剣把頭の呼称がふさわしいのかも知れないが，その後朝鮮半島で細形銅剣に装着され始める事から形が変化し，次第に装飾的な機能を持つに至ったのであろう。平壌貞柏里出土の銅張石製把頭飾（十字形）の存在は，[註16]岡内氏分類のAⅡ式からその移行が始まった事を示している。

同時にこのタイプは，秋山氏分類のⅢ式にあたり，[註17]その時期は，戦国末～前漢の頃とされる。[註18]そうであれば前3～2世紀にその上限の時期の一端が伺い知れよう。石製把頭飾の下限については，AⅣ型にすでにその存在が無いとすれば，AⅣ型を出土する金海良洞里遺跡がAD1世紀に比定されているところから[註19]それ以前という事になる。

我国出土の例をみると，型式的には下関市高山遺跡の一字形を除くと，十字形，有鈕十字形と朝鮮半島出土のAⅡ，AⅢ型が全てである。時期的には前期末～中期初頭例が多く，地域的には当時の先進地域をとり囲む状況が看取される。そして，その共伴遺物としては，下ノ方，荒堅目，里田原で磨製石剣が出土しており，磨製石剣＋石製把頭飾という構図が考えられる。里田原遺跡では，これに木製剣柄が伴っており，周辺地区に於ける石製把頭飾の在り方を暗示している。(Fig. 11，Tab. 3)

次に銅製把頭飾をみてみよう。

銅製把頭飾は我国での出土が12遺跡15例であると述べたが（Fig. 10，Tab. 4)，地域的，時期的に大きな差がある。まず福岡市吉武樋渡K—75の例は岡内氏分類のAⅢ型，有鈕十字形把頭飾にあたるもので，[註20]朝鮮半島に於ける青銅器文化第Ⅲ期[註21]に普及したタイプである。時期は，野方久保，吉武大石の例を合わせると，前期末～中期中頃に比定され，何れも甕棺内より出土している。この場合，吉武樋渡，野方久保の場合，本来あるべき姿である銅剣に装着された状

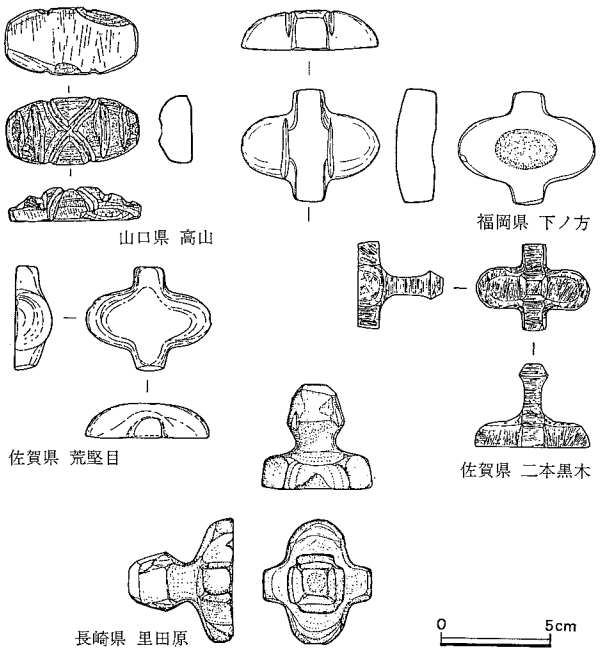


Fig. 11 国内出土「石製把頭飾」例

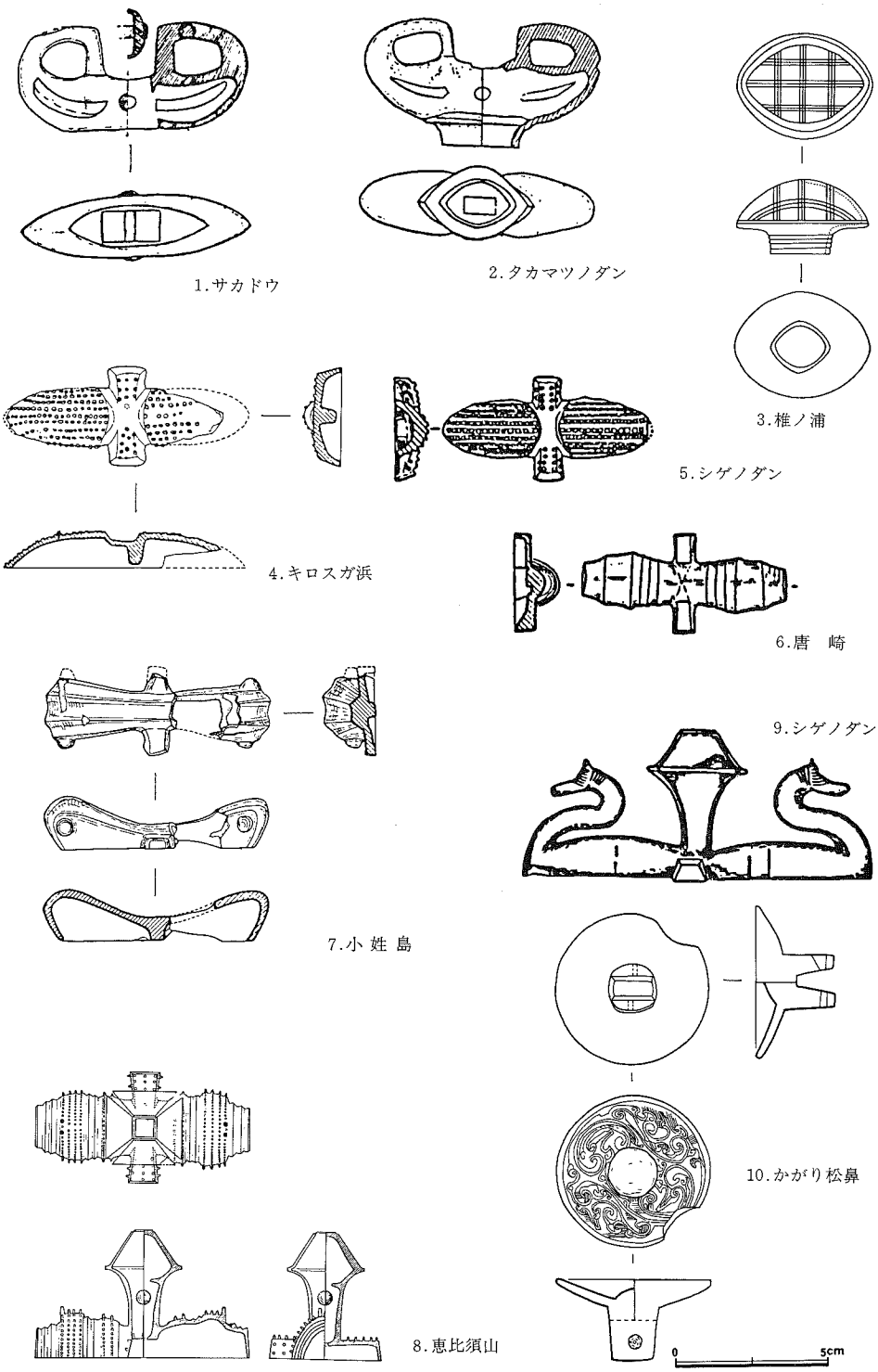


Fig. 12　対馬出土「銅製把頭飾」例

況で埋納されたものと思われる。

対馬の場合はどうであろうか。

まず，形態的には福岡市出土のものに比して変化に富む。以下概観してみよう。(Fig. 12)

1，2は従来から所謂触角式と呼称されるもので，オルドス式銅剣に通有な把頭飾であるが後出するタイプのものであるらしい。[註22] 時期的には，この先行型式である，把頭飾から鐔までを同鋳した柏崎資料等が，朝鮮半島での例で前漢代中葉頃に求められることから，それ以降である事になる。[註23]

3は椎ノ浦1号石棺から細形銅剣，鐔金具と共に出土した。調査者によると，把頭飾としては朝鮮半島でも類例が無いらしい。[註24]

4・5は粟粒文十字形把頭と呼称されるものである。岡内氏分類のAⅢ型にあたり，キロスガ浜で1例，シゲノダンで2例出土している。類似資料は，朝鮮半島北部平壌附近で2例，[註25] そして南部では慶尚南道南海郡昌善面堂項里の小草島で無文土器片と共に発見されている。[註26]

6の唐崎出土類似資料は，黄海北道黄州郡黒橋里で五銖銭，細形銅剣，銅製乙字形管金具等と共に，[註27] 又平安南道龍岳面で，多くの鉄製利器，武器，細形銅剣と共に出土している。[註28] 時期としては，武末氏分類によるⅢb群，前漢末～後期初頭とされる。[註29]

7のタイプは2個出土しており，その内1個は小姓島2個目は佐護白岳例がそれに当る。鈕が無く岡内氏分類のAⅡ型に相当しよう。只，佐護白岳出土例には，小姓島出土にみられる両端の小さなこぶ状突起は見当らない。類似資料は，朝鮮半島では，大邱晩村洞，[註30] 同飛山洞[註31]より出土している。これらの遺跡は内容的に同一と考えられ，時期的にはやはり武末氏分類のⅢb群にあたる。

8，9は共に有鈕の十字形把頭飾の発展形式とみられる。9は双獣付十字形把頭飾と呼称されてきたもので，岡内氏分類のAⅣ式にあたり，朝鮮半島では伝公州に1例，金海良洞里に1例類似品が知られている。[註32]

以上照会した資料は1～9まで，3の不明の例を除くと例れもその祖型が朝鮮半島に求められ，又舶載品である事は疑う余地が無い。

10はこれまで朝鮮半島及び日本でも例をみないタイプの把頭飾であり，所謂“桃氏剣”と呼ばれる中国戦国式銅剣の把頭部につけられる笠形円盤装飾の一種で，中国では剣首と呼ばれる。春秋末から戦国時代にかけて盛行し，当初は銅剣，柄と共鋳であるが，恐らく戦国末以降の鉄剣の出現と共に，剣身と別鋳式のものが作り出されたものと思われる。

銅剣と同鋳のタイプのものは，河南，安徽，浙江，江蘇，湖南の各省を集中分布地域として揚子江江南区域まで及んでいるが，山東半島以北には殆ど発見されないという。[註33]

一方，本例の如き別鋳例になると河南省洛陽出土の例[註34]はともかく，更に南は広東省広州市，[註35] 広西省平乗県，[註36] 西は云南省[註37]まで拡大し，前漢の版図と軌を一にする。(Fig. 13)

しかし，同鋳の例を含め，中国東北地方からの出土例は無く，該地域に流布していたタイプ

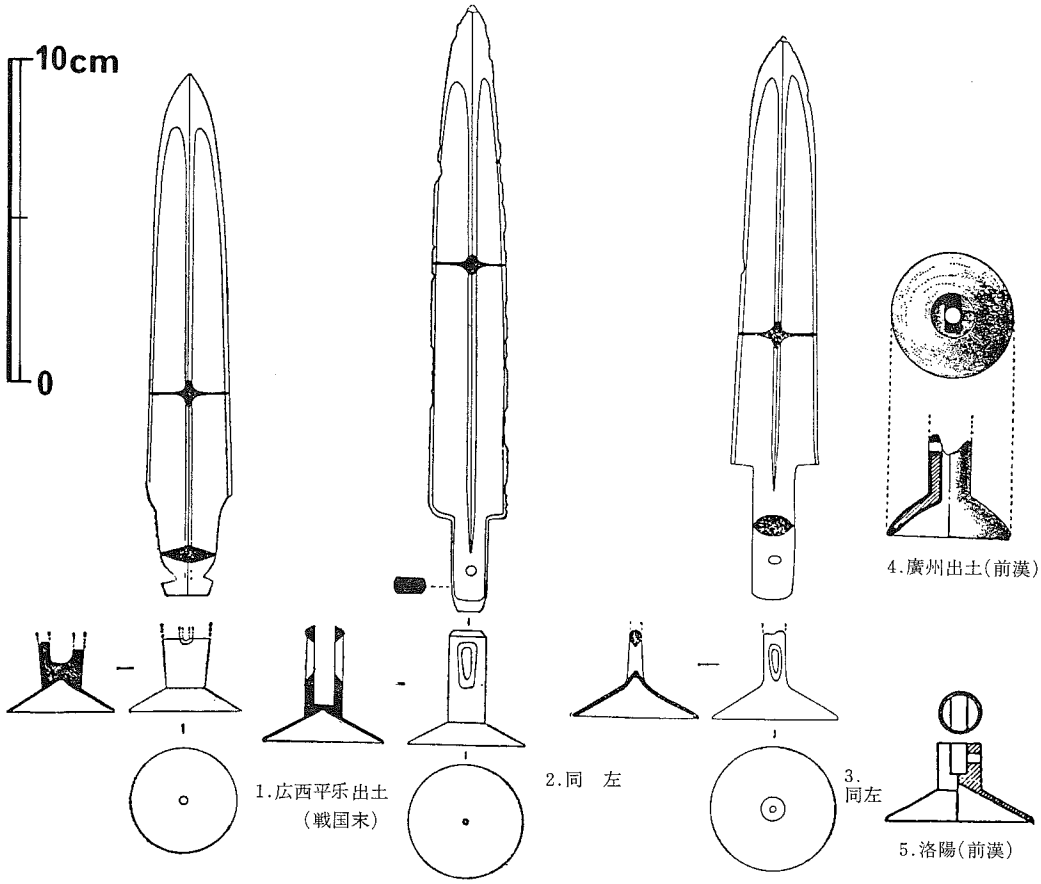
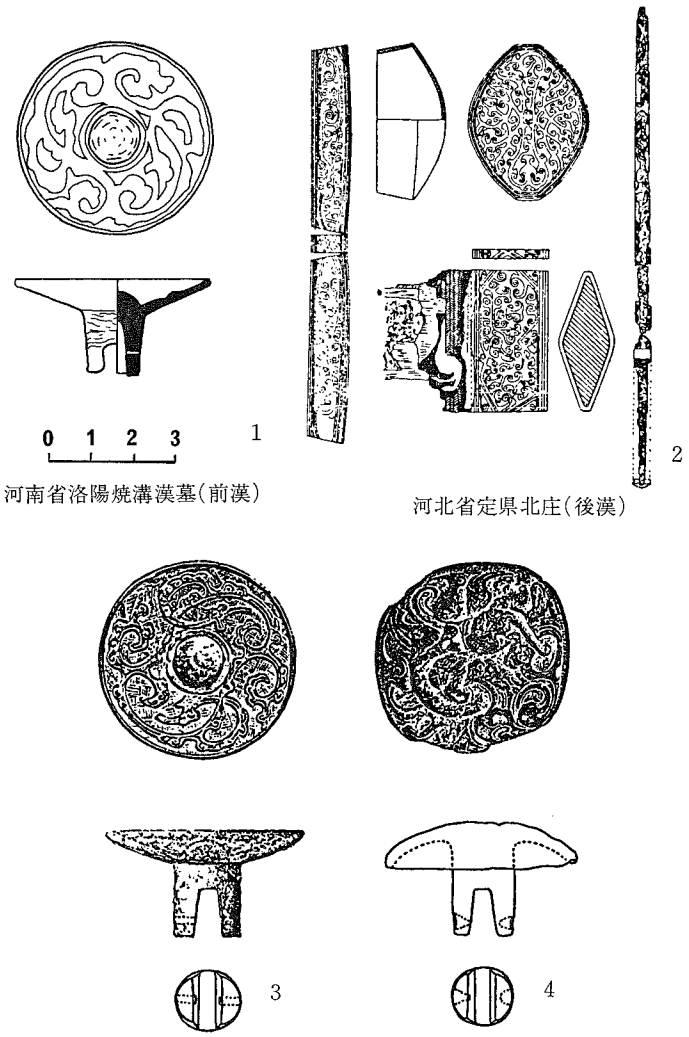


Fig. 13　中国出土「別鋳把頭飾」例

のものとは明らかに系統が異なる。

次に把頭飾笠部内側の浮彫りの文様であるが，管見にふれた例では以下の4例が知られる。**1**は河南省洛陽焼溝漢墓1017号墓より出土した鉄剣銅製柄頭飾（銅剣首）で径4.5cm程で笠部内側に流雲形花紋を配している。[註38] 共伴する五銖銭の時期から前2世紀始め頃のものかと思われる。**2**は河北省定県北庄出土のもので，共伴する銅製弩机の銘文から後漢建武末年（紀元56年）～章和末年（紀元88年）の時期が比定されている。[註39] **3**，**4**は何れも，O. ヤンセによる「中国発見古代剣に関する報告」[註40]の中で紹介されている資料であるが，原典に接していないので，法量，出土地，時期等については判らない。只**3**の例はかがり松鼻遺跡出土例と同笵と思える程，形状・文様共に酷似する。(Fig. 14)

してみると，この種の把頭飾は，形状的には戦国末～前漢にあらわれ，中国東北地方を除く前漢の版図内に広く分布し，文様的には前漢～後漢にかけて洛陽を中心とした黄河中，下流域で流行した可能性が強い。以上これらの条件を纏めると，確実な類例に乏しい為断定はできないが，洛陽を始めとする所謂中原地方を中心とし，前漢代（前2世紀以降）に製作流布された



河南省洛陽焼溝漢墓(前漢)　　河北省定県北庄(後漢)

O.ヤンセ報告書内記載

Fig. 14　文様がある把頭飾の例

ものと推定して大過ないように思える。

対馬に於いては，現在61遺跡で青銅器の出土が知られている[註41]が，それらの在り方については以下の論文に代表される。

まず，朝鮮半島からの我国への青銅器については，①第Ⅰ期　朝鮮製の銅利器を中心とするもので，甕棺編年で前期末〜中期前半，②第Ⅱ期　朝鮮製の銅利器と前漢文物が組み合う時期で中期中頃〜後半，③第Ⅲ期　中国製品と国産銅利器が副葬される後期前半〜中頃に大別される。又，その伝来ルートについては，当初より朝鮮半島—対馬—壱岐—末盧—奴国が考えられるのにかかわらず，対馬にはⅠ期，Ⅱ期流入の遺物が殆ど無く，素通りした感があるのに対して，逆に北部九州に於いては，対馬に見られる各種異形青銅器が殆ど無く，又Ⅱ期前半までの遺物は出土するが，以降は半島色が薄れ，独自の文化が作られた事により朝鮮製の遺物は出土しなくなるとされる。そして，それらの現象については，まず①対馬出土の青銅製品の多くは，朝鮮半島で作られた時期そのものが遅いこと，②それ以前の青銅器自体量が限られており対馬で保有する程の条件が形成されていなかったこと，③それが弥生後期に至り大形国産青銅器の大量鋳造に伴い，需要輸入量が増大し，合わせてようやく対馬にも交易等による富の蓄積が計られることで青銅製品を残せる条件がととのったからとされる。又，北部九州に当初輸入された把頭飾を含む種々の青銅製品は，必要品を残して鋳つぶされたと考えられている[註42]。

一方，下条氏は，対馬に於ける青銅器の出土状態は，例えば，剣，剣把，把頭飾といった本来一体であるべきはずのものがばらばらの状態であったり，脈絡の無い遺物どうしが棺内に一括して埋置されたりする現象から，それらの遺物を単なる銅の集合体としてとらえられている。又，対馬出土の青銅器は，朝鮮半島における青銅器文化の終末期のもので，いわば，半島に於いても不要になった青銅器が将来したもので，且つ北部九州での銅鉾など銅製再生品の原料として待機している状態であったとされ，氏も又，鋳つぶし説を唱えられている。[註43]

ここで考えてみたいのは，先きの中国製把頭飾のことである。

この種の把頭飾が前漢代に中原地域で製作された非朝鮮系の種類のものである事は述べた。そして，その後，鏡等の中国製品と共に楽浪郡へ一旦運ばれた事は想像に難くない。只，その時期の朝鮮半島は，ＢＩ型細形銅剣，多鈕細文鏡に代表される盛行した青銅器時代であり，把頭飾については，先述した如く，石製加重器が銅製把頭飾へ転化移行し独自な形を作り出した頃に相当し，この中国系のものが細形銅剣に着装されたとは考えにくい。もし，着装したとすれば，やはり中国製の茎の長い鉄剣であったろう。何れにせよ，楽浪で一定期間存続していたであろう事は推定できる。

さて，かがり松鼻遺跡の場合，変形細形銅剣と1,200個のガラス玉と共伴した。この種の剣は，朝鮮半島でも青銅器時代終末期に儀器として鋳造された可能性が強いものとされており，対馬に於ける出土時期は何れも弥生後期前半に集中している。一方，ガラス玉の場合も後期前半に量的に拡大集中する傾向は前に述べた。この傾向を必ずしも大量の国産化の結果とみないならば，[註44] この時期，剣，把頭飾，ガラス玉をセットとした朝鮮半島からの将来品とする事も可能であろう。この場合輸出地は，銅剣の推定生産地である慶尚南道金海[註45]あたりが考えられるが，その前提としては中国系把頭飾も楽浪から該地域へ運ばれ，更に少なくとも一世紀以上は伝世していなければならない。

なお，対馬海人と楽浪との直接交渉による獲得の可能性は，目的が把頭飾とガラス玉では理由薄弱の感があり考え難い。

一体に前漢鏡を含む中国系遺物は，弥生中期中葉〜後葉には北部九州の甕棺内より副葬品として出土するが，１例ながら戦国式銅剣が壱岐原ノ辻18号甕棺[註46]（中期中葉）内から出土しており，この種の把頭飾もそれらと同時期に舶載された可能性もある。その後，銅製把頭飾や異形青銅器を含む朝鮮製青銅器は国産銅利器の為の原料となった可能性もあるが，鏡の文様にも通じた特異な意匠を持つこの把頭飾が鏡などと同じく宝器的な扱いを受けて伝世した後，後期に至って国産化された銅矛やガラス玉等と共に対馬へ逆移入されたとする説は成立しないであろうか。

なお，全羅北道完州出土の26口の戦国式銅剣について，楽浪終由ではなく，中国江南地方との直接交流を示唆される論述がある。[註47] 文物の伝搬ルートを１つに限定しないという点において極めて魅力的である。

蛇足ながら，当初触れた石製把頭飾については，その流入当初は銅製把頭飾を含む朝鮮製銅製品と共に，武末氏の言われる第Ⅰ期，すなわち弥生前期末〜中期前半に将来したものと思われる。その後，石製の方は北部九州の先進地域には稀薄でその周辺部に顕著という差異が生じている。青銅器の当初の流入量の僅少さと，それを保有し得る条件を内在する地域とそうでない地域の格差が銅製と石製の差となって反映されたものであろう。　（高野）

報文作成にあたり下記諸先生方より資料の提供，御教示を賜わった。記して感謝申しあげたい。

全　栄来，穴沢咏光，江坂輝彌，渡辺　誠，中山清隆（敬称略）

註1　下条信行「南北市羅考」史淵　第116号　1979

註2　田平町教育委員会「中野ノ辻遺跡・里田原遺跡」田平町文化財調査報告書　第1集　1982
以下ガラス王の項については本書参照

註3　東亜考古学会「対馬」東方考古学叢乙種第六冊　1953

註4　坂田邦洋「恵比須山遺跡発掘調査報告」長崎県峰村教育委員会　1974

註5　対馬遺跡調査会「豊玉村佐保シゲノダンと唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告」長崎県文化財調査報告書　第8集　1969

註6　長崎県教育委員会・九州大学編「対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―」長崎県文化財調査報告書　第17集　1974

註7　尹　武炳・岡内三真訳「金海出土の異形銅剣・銅鉾」九州考古学46　1972

註8　但し，尹氏はその後，異形青銅器の製作地問題については慎重な態度をとっておられる。尹武炳・武末純一訳「慶尚北道・伝尚州地方出土の異形青銅器」古文化談叢　第8集　1981　所収

註9　(a)　武末純一「舶載青銅器について」註6文献所収
(b)　下条信行　註1文献

註10　福岡県教育委員会「三雲遺跡―南小路地区編―」福岡県文化財調査報告書　第69集　1985

註11　a　岡崎　敬　他「立岩遺跡」河出書房　1977
b　唐津市教育委員会「柏崎松本遺跡」唐津市文化財調査報告書　第2集　1980

註12　島田貞彦，小川五郎「長門向津具出土の飾柄銅剣」史林　第17巻1号　1922

註13　資料掲載文献は下記のとおり
ⓐ　藤田亮策・梅原末治「朝鮮古文化総鑑」第一巻　養徳社　1946　75〜79頁
ⓑ　沈　奉謹・藤口健二訳「慶南地方出土青銅遺物の新例」古文化談叢　第8集　九州古文化研究会　1981　147〜153頁
ⓒ　全栄来「錦江流域青銅器文化圏新資料」91頁
ⓓ　李　清圭「編年」韓国史論　13　韓国의考古学Ⅱ・下　國史編纂委員会　1983　531〜540頁
ⓔ　尹　徳香「石器」韓国史論　13　韓国의考古学Ⅱ・上　國史編纂委員会　1983　26頁
ⓕ　朴　敬源・岡内三真訳「金海良洞里出土遺物について」史林　第56巻3号　1973　130〜136頁
ここに図示したのは6遺跡のみ。

註14　岡内三真　註13ⓕ文献

註15　新　枫毅「朝阳地区发现的剑柄端加重器及其相关遺物」考古2　1983

註16　註13ⓐ文献　78〜79頁

註17　秋山進午「中国東北地方の初期金属器文化の様相(上)」考古学雑誌　53―4　1968　20〜22頁

註18　林　澐・近藤喬一訳「中国東北銅剣初論」古文化談叢　第8集　九州古文化研究会　1981　41～63頁

註19　註13ⓕ文献　137頁

註20　註1文献

註21　樋口隆康「弥生時代青銅器の源流」古代史発掘　⑤　講談社　1974　87～95頁

註22　註6の文献　429頁

註23　中国東北地方に於いては，銅柄銅剣のものは戦国中期～前漢初，銅柄鉄剣のものが前漢初～前漢中期に用いられたとされる。張　錫瑛「试论我国北方和东北地区的"触角式"剑」考古8　1984　744～751頁

註24　坂田邦洋「峰町東岸地域埋蔵文化財発掘調査報告」峰町文化財調査報告，長崎県上県郡峰町教育委員会　1981　23頁

註25　註13(a)文献　図版41

註26　沈　奉謹，藤口健二訳「東亜大学校博物館所蔵の青銅遺物新例」古文化談叢　第17集　古文化研究会　1987　129頁

註27　註13(a)文献　30～32頁

註28　註13(a)文献　34～37頁

計29　註9(a)文献　418～419頁

註30　註1文献　202～203頁

註31　註1文献　202～203頁

註32　註7文献　131～139頁

註33　全栄来・後藤直訳「完州上林寺出土中国式銅剣に関して」古文化談叢　第9集　1982　75～84頁

註34　河南省文化局文物工作队「洛阳西汉壁墓発掘報告」考古学報2　1964　120頁

註35　广州市博物館他「廣州漢墓」中国田野考古扱告集　考古学专刊　丁种第二十一号　1981　141頁

註36　广西壮族自治区文物工作队「平乐銀山岭战国墓」考古学報　2　1978　233～235頁

註37　張　増祺「云南銅柄鉄剣及其有关問題的初步探讨」考古　1　1982　60～64頁

註38　中國科學院考古研究所「洛陽燒溝漢墓」中國田野考古報告集　考古学專刊　乙種　第六號　1959　192頁

註39　河北省文化局文物工作队「河北定县北庄汉墓発掘報告」考古学報　2　1964　144頁

註40　全州博物館長全栄来氏より同報告書の一部コピーの提供を受けた。
Olov JANSE Notes sur Quelques épées anciennes trouvées en Chine, BMFFA No. 2 1930

註41　武末純一「壱岐・対馬の青銅武具」考古学ジャーナル　№282　ニューサイエンス社　1987　6頁に加筆

註42　註9(a)文献　431頁

註43　註1文献　208頁

註44　小林行雄「続古代の技術」塙書房　1964　248～249頁

註45　註9(a)文献　430頁

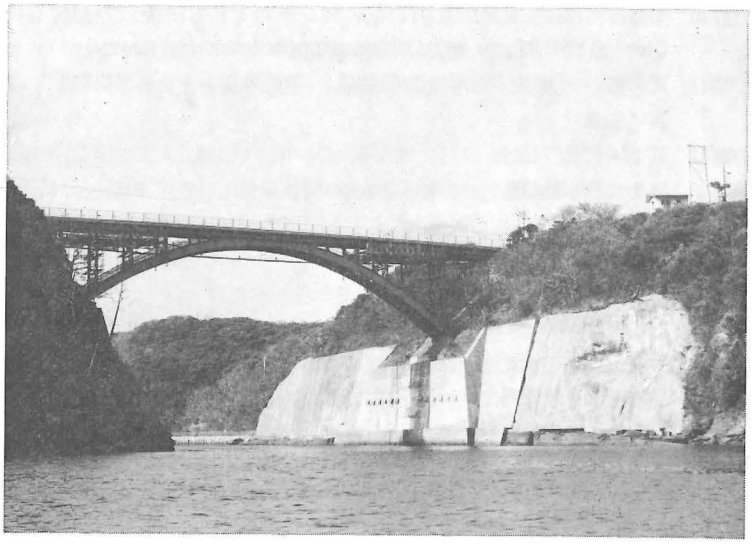
註46　1974年県教委調査

註47　註33文献　84頁

追　脱稿後，江坂輝彌先生，渡辺誠先生の御配慮により註40文献の原典コピーに接し得た。それによると出土地，時期等は不明であるが Fig. 14-3 の法量は，径4.7cm，高さ2.5cmである。

文献

1 水島稔夫 「下関市高山遺跡発見の石製剣把頭」 古代文化7 1981 57〜59頁
2 飯塚市教育委員会 「下ノ方遺跡」 飯塚市文化財調査報告書 第6集 1982
3 佐賀県教育委員会 「寺浦廃寺跡」 佐賀県文化財調査報告書 第34集 1976
4 唐津市教育委員会 「宇木汲田遺跡調査概要」 唐津市文化財調査報告書 第21集 1987
5 福岡県文化会館 「対馬の美術」 1978 所収
6 長崎県教育委員会 「里田原遺跡―略報Ⅱ―」 長崎県文化財調査報告書 第18集 1974
7 福岡市教育委員会 「吉武高木」 1986 12〜14頁
8 埋蔵文化財研究会第20回研究集会 「弥生時代の青銅器とその共伴関係―九州篇―」 1986 19頁
9 福岡県教育委員会 「三雲遺跡―南小路地区編―」 福岡県文化財調査報告書 第69集 1985
10 唐津市教育委員会 「柏崎松本遺跡」 唐津市文化財調査報告書 第2集 1980
11 島田貞彦，小川五郎 「長門向津具出土の飾柄銅剣」 史林 第17巻1号 1922
12 東亜考古学会 「對馬」 東方考古学叢刊乙種第六冊 1953 25図
13 増田精一 「長崎県対馬調査報告」 考古学雑誌 第49巻1号 1963
14 長崎県教育委員会 「対馬―浅茅湾とその周辺の考古学調査―」 長崎県文化財調査報告書 第17集 1974 353〜354頁
15 坂田邦洋 「恵比須山遺跡発掘調査報告」 長崎県峰村教育委員会 1974 34〜35頁
16 坂田邦洋 「峰町東沿岸地域埋蔵文化財発掘調査報告」 長崎県上県郡峰町教育委員会 1981 22〜23頁
17 対馬遺跡調査委員会 「対馬―豊玉村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告―」 長崎県文化財調査報告書 第8集 1969
18 全栄来 「錦江流域青銅器文化圏新資料」
19 藤田亮策・梅原末治 「朝鮮古文化総鑑」 第一巻 養徳社 1946
20 朴 敬源・岡内三真訳 「金海良洞里出土遺物について」 史林 第56巻3号 1973
21 沈 奉謹・藤口健二訳 「慶南地方出土青銅遺物の新例」 古文化談叢 第8集 九州古文化研究会 1981
22 沈 奉謹・藤口健二訳 「東亜大学校博物館所蔵の青銅遺物新例」 古文化談叢 第17集 古文化研究会 1987



PL.6 久須保浦より万関橋を臨む

Tab. 3　国内出土石製把頭飾地名表

分布図番号	遺跡名	所在地	共伴・遺物（遺構）	石材	時期	形態	文献
1	高山	山口県下関市綾羅木		凝灰質頁岩	前期末～中期	一字形	1
2	下ノ方	福岡県飯塚市立岩	石庖丁，石鏃，磨製石剣，他		中期初頭	十字形	2
3	前田山	〃　行橋市前田山	（袋状竪穴）	磁鉄鉱	前期末	有鈕十字形	1
4	栗田	〃　朝倉郡三輪町	（土器溜）	砂岩	〃	〃	1
5	荒堅目	佐賀県神埼郡神埼町	磨製石剣	褐鉄鉱		十字形	3
6	二本黒木	〃　三田川町二本黒木		蛇文岩		有鈕十字形	3
7	宇木汲田	〃　唐津市宇木汲田	銅鐸舌（土拡）			十字形	4
8	千尋藻	長崎県下県郡豊玉町	（石棺）		前期～中期	十字形	5
9	里田原	〃　北松浦郡田平町	木器，磨製石剣，鉄ノミ他	方鉛鉱	中期初頭	有鈕十字形	6

Tab. 4　国内出土銅製把頭飾地名表

分布図番号	遺跡名	所在地	共伴，遺物（遺構）	形態	時期	文献
10	吉武樋渡	福岡市吉武	（甕棺）細形銅剣（BⅡ）	有鈕十字形	中期後半	7
11	吉武大石	〃	（甕棺）		前期末	7
12	野方久保	〃　野方久保	（甕棺）細形銅剣		中期初	8
13	三雲	福岡県糸島郡前原町	（甕棺）		中期中葉	9
14	柏崎石蔵	佐賀県唐津市	銅鉾	BIa 型銅剣		10
15	向津具	山口県豊浦郡油夜町			中期	11
16	佐護白浜	長崎県上県郡上県町	変形細形銅剣，角形銅器 有鈎銅釧，弥生土器，三韓土器	十字枕	後期	12
17	タカマツダン	〃　〃　峰町	（石棺）小銅鏡，弥生土器 細形銅剣，半球形飾金具，小銅鏡 直口壺形土器，小形仿製鏡（推定）	触角式	後期前半	13
18	サカドウ	〃　〃　〃	中細形銅矛，細形銅剣 笠頭形銅器，角形銅器，双頭管状 銅器，平環，有孔十字形銅器	触角式	後期初頭	13
19	恵比須山 8号石棺	〃　〃　〃	（石棺）変形細形銅剣，弥生土器	有鈕十字形	後期前半	15
20	椎ノ浦 1号石棺	〃　〃　〃	細形銅剣，鍔金具 弥生土器（石棺）	笠頭形	後期初頭	16
21	小姓島	〃　〃　〃	（石棺）弥生土器，鉄剣 〔棺外〕弥生土器	十字枕	中期末～ 後期初頭	14
22	唐崎	〃　〃　豊玉町	（石棺）鞘尻金具，角形銅器 平環，半球形飾金具，双頭管状銅器 笠頭形銅器，弥生土器	十字形	後期	17
23	キロスガ浜	〃　〃　〃	（石棺）把頭飾，中広形銅矛（共伴不明）	粟粒文，十字形		14
24	シゲノダン	〃　〃　〃	（石蓋土擴埋納）中広形銅矛 変形細形銅剣，貨泉，馬鐸 鉄剣，鉄刀子，鉋，鉄，鏃	粟粒文十字(2) 双獣付有鈕	後期	17
25	かがり松鼻	〃　下県郡美津島町	石棺，変形細形銅剣，ガラス玉	戦国式	後期前半	本書

Tab. 5　朝鮮半島西・南部出土把頭飾出土地名表

分布図番号	遺跡名	所在地	材質	共伴遺物	文献
26	水木里	全羅北道扶余水木里	石製		18
27	来里	慶尚北道慶州郡内東面時	〃	石製剣把頭飾	19
28	南山	〃　慶州郡南山	〃	石製剣把頭飾	19
29	坪里	〃　〃　内東面	〃	石製剣把頭飾	19
30	長箭洞	慶尚南道釜山市長箭洞	〃		20
31	内里花山鋼	全羅南道務安郡石津面	〃	石製剣把頭飾	19
32	検ト里	忠清南道扶餘郡窺岩面	銅製	細形銅剣1，銅剣把頭飾1	19
33		〃　太田府附近	銅製	銅製剣把頭飾	19
34	洛山洞	慶尚北道善山郡海平面	銅製	銅剣銅柄頭飾	21
35	晩村洞	〃　大邱市東区	銅製	細形銅剣3，剣把頭飾1，鍔1，中廣銅戈1	21
36	飛山洞	〃　大邱市	銅製（触角式）	細形銅剣5，剣把頭飾1，蓋弓帽2 銅剣附属金具，狭鋒銅鉾2，中鋒銅鉾1	21
37	入室里	〃　慶州郡外東面	銅製	細形銅剣4口，細形銅剣1口 銅剣把金具1個，狭鋒銅鉾2口，クリス形銅戈1口 小銅鐸1個，銅製馬鐸1個，銅馬鐸3個 多鈕細文鏡1面，小銅棒，銅鑃1個， 柄付銅鈴1個，銅製鈴附柄頭1個 銅製鈴附錨形金具1個，銅飾鋲1個 鐵斧頭1個，鐵剣身片1個，土器1個	19
38	新倉二里	全羅南道光山郡飛雅面	銅製	銅製剣把頭飾	21
39	新燕里	〃　霊岩郡始終面	銅製	銅鉾，銅製剣把頭飾	21
40	洛東江畔（傳）	慶州北道尚州郡洛東面	銅製（粟粒文）	剣把頭飾1，鞘金具1，多鈴銅器	21
41	朝陽洞	〃　慶州市	不明	銅鐸1，多鈕無文鏡1，剣把頭飾1， 青銅製馬鐸2，土器	21
42	九政洞	〃　〃	〃	細形銅剣2，細形銅鉾3，細形銅戈1， 剣把頭飾2，銅鐸1，鐵斧，鐵刀	21
43	良洞里	慶州南道金海郡酒村面	銅製	新・後漢鏡1，剣把頭飾1， 鐵剣2，鐵鉾2	21
44	山格洞	慶尚北道大邱市山格洞	土製		20
45	洪北里	全羅南道拱北里	土製		20
46	小草里	慶尚南道南海郡昌善面堂項里	銅製（粟粒文）		22

六　美津島町かがり松鼻遺跡出土「把頭飾」のエックス線撮影について

（Fuji computed Radiography の有用性）

長崎大学附属病院　放射線部　斎藤　匠司
長崎記念病院　放射線科　中村源之助
〃　　馬込　万助

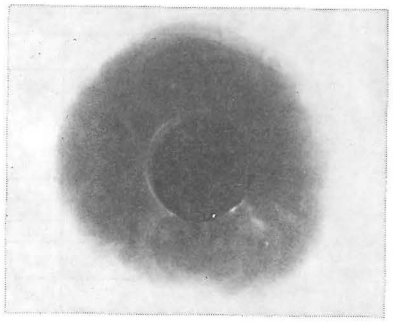
今回我々は長崎県教育庁文化課より「把頭飾」のX線撮影を依頼された際，一般的な銅製品に対するX線撮影と共に Fuji computed Radiography（以下，CR と略す）を使用して撮影する事を考え実行した所，予期以上の成果を得たので特に附記として報告する。

我々の所に撮影依頼された当時の「把頭飾」は発掘当初のものらしく，一部青銅色をし，土（泥？）が附着し，表面にわずかに模様らしきものが観察される状態であった。

一般的にX線の吸収は吸収体の原子番号とその密度（厚さ）より左右される。例えば，人体は骨としての Ca から肺内の空気までその原子番号と密度は大きな差がある。

そして吸収体を通過したX線は吸収体の原子番号と密度に比例した強弱があり，これをX線フィルムに捉える事によりX線写真ができる。他方，銅製品の場合，他金属による象嵌がない限り，原子番号は同じであるので，その表面（裏面）の模様・鋳造時のス・埋没中の腐食・キズにより密度（厚さ）が異なる部分が出来，その差をX線像として促える事が出来る。但し人体に比較し原子番号差が殆どないため，そのX線像はコントラストに欠け，更にX線エネルギーが高くなるため，散乱X線により像は更にボケを生じ，㎜単位で病巣を追及する医療用X線写真に比し見劣りが生じるのはやむを得ない事であり，特に「把頭飾」の様に盃状の形体においては中央部と周辺部の間に濃淡の差が生じる事も当然である。(PL. 7)

我々が今回使用した CR はそれらを全て解決していた。CR は本来富士フィルム写真株式会社が医療用に開発した装置である。



ＰＬ．７　Ｘ線写真

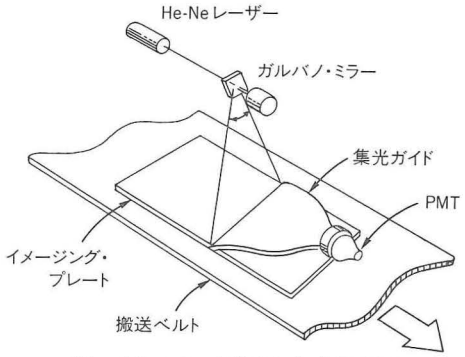


Fig. 15　データ読みとり方法略図

実際上の撮影は普通のX線撮影と同じである。ただ違う所は，X線フィルムの代りに Imaging Plate（以後，IP と略す）を用い，その IP を画像処理装置にかける事である。IP の大きさ（厚さ）は普通のX線用カセットとほぼ同大である。IP はプラスティックフィルム上に二価のユウロピウムイオンを微量に含むバリウムフロロマイド結晶（$BaFBri : Eu^{2+}$）が塗布されたものであるが，この物質は光輝尽発光体（Photo Stimulated Luminescens, PSL）と呼ばれるもので，最初の刺激（一次励起）が光輝尽発光体内にメモリーされ，その後の光（二次励起）によりメモリーされた情報が読み出される。

言い換えるならば，吸収体を通過したX線はその強弱に応じた情報として IP 内に蓄えられX線フィルムの現像処理の代わりに微小レーザー光（He-Ne レーザービーム100μ径）で IP 表面を走査し，レーザー光により励起された情報は集光ガイドによって二次電子増倍管に集められ電気信号と変換される。(Fig. 15)

尚，画像情報を読み取られた IP は可視光線を均一に照射する事により，残存した情報は消去され繰り返し使用が可能な状態となる。

この電気信号を画像処理装置に送るが，画像処理装置は後述する画像処理を可能ならしめる各種のアルゴリズムをハード化した Computer 装置であり，画像処理そのものは操作卓により目的に応じた処理を行う事が出来る。

画像処理された電気信号は画像記録装置に送られ，再びレーザー光の強弱に変換され CR 用フィルムに記録され現像される。

以上，簡単に CR の機構について述べたが，今回の「把頭飾」の CR 撮影は当初 100kV，100m AS で撮影され，更に3倍まで拡大撮影し鮮明な画像を得るために階調処理，微細部描出のための空間周波数処理，又，IP のX線量分布の解析とX線像コントラスト分布の測定及び計算処理を行い，X線量のバラツキに対しても適性な画像が得られる様補正されている。

この間（IP の読取り開始より現像終了まで）およそ3分であるが，その結果は表紙の写真の如きものとなった。

CR 装置による「把頭飾」のX線写真は一般的方法によるX線写真に比し，微細部の描出，コントラストの表現，盃状の形体にもかかわらず，均一した画像等特に秀れていると考えられる。

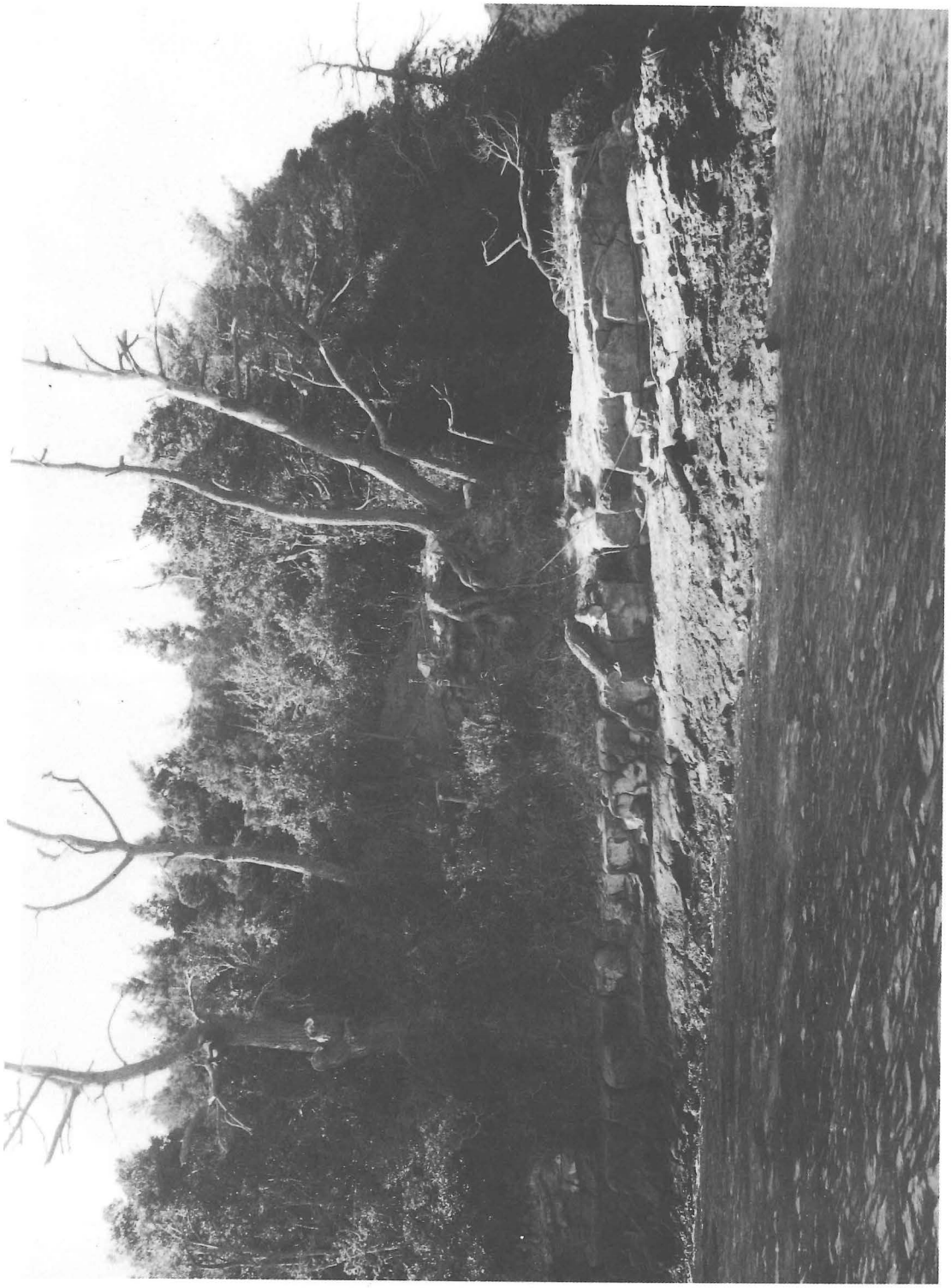
今後，更に実験を重ね，CR の考古学的美術史学的有効性を検討して発表したいと考えている。

終りにあたり，特に附記を許可された長崎県教育庁文化課主任文化財保護主事高野晋司氏に感謝いたします。

（斎藤）

参考文献：富士メディカルフォーラム No. 153 1986

PL. 8 遺跡近景



PL. 9

露出していた細形銅剣（棺床下部より）

調 査 風 景

表土除去状況

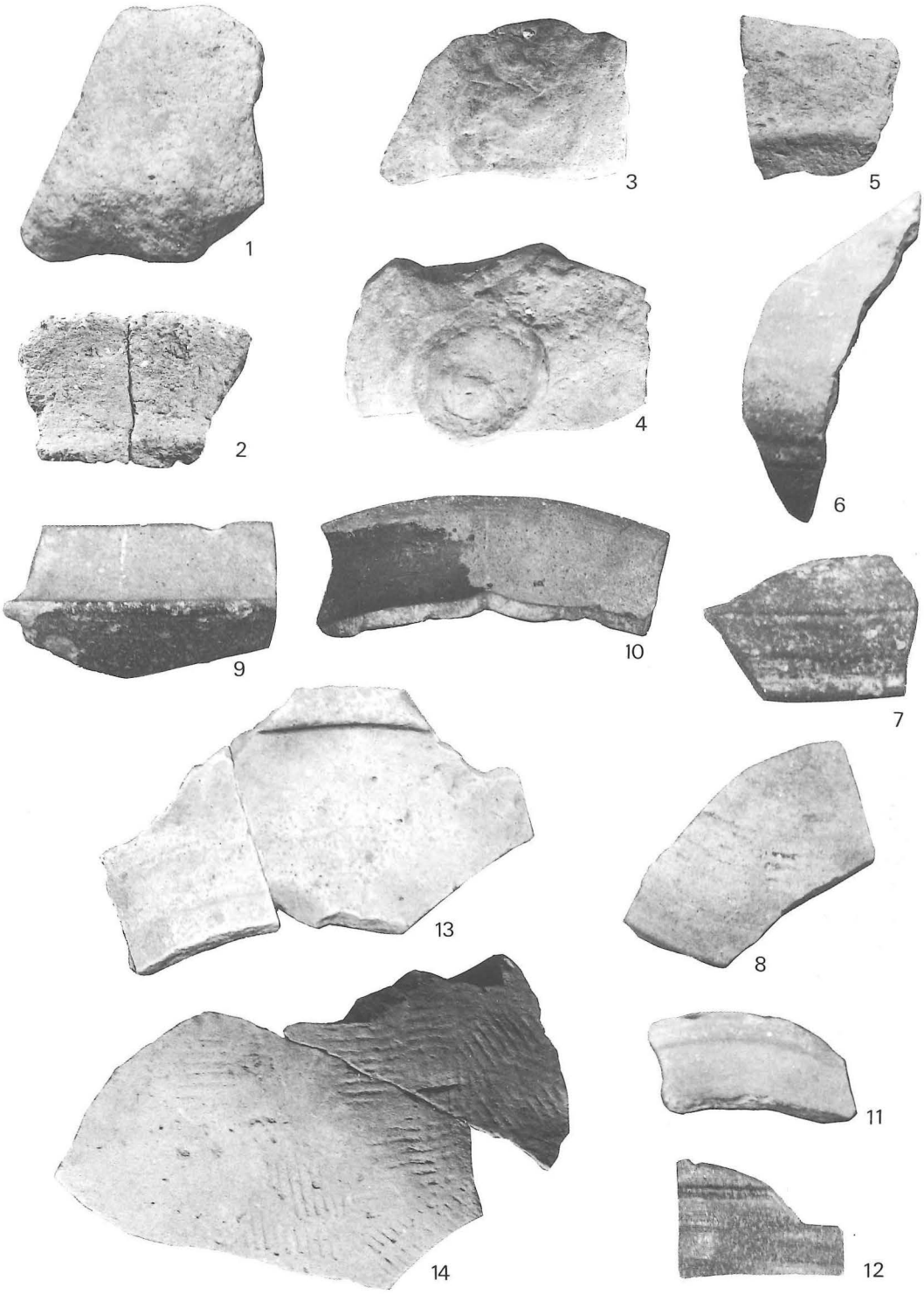
棺床面露出状況

PL. 11

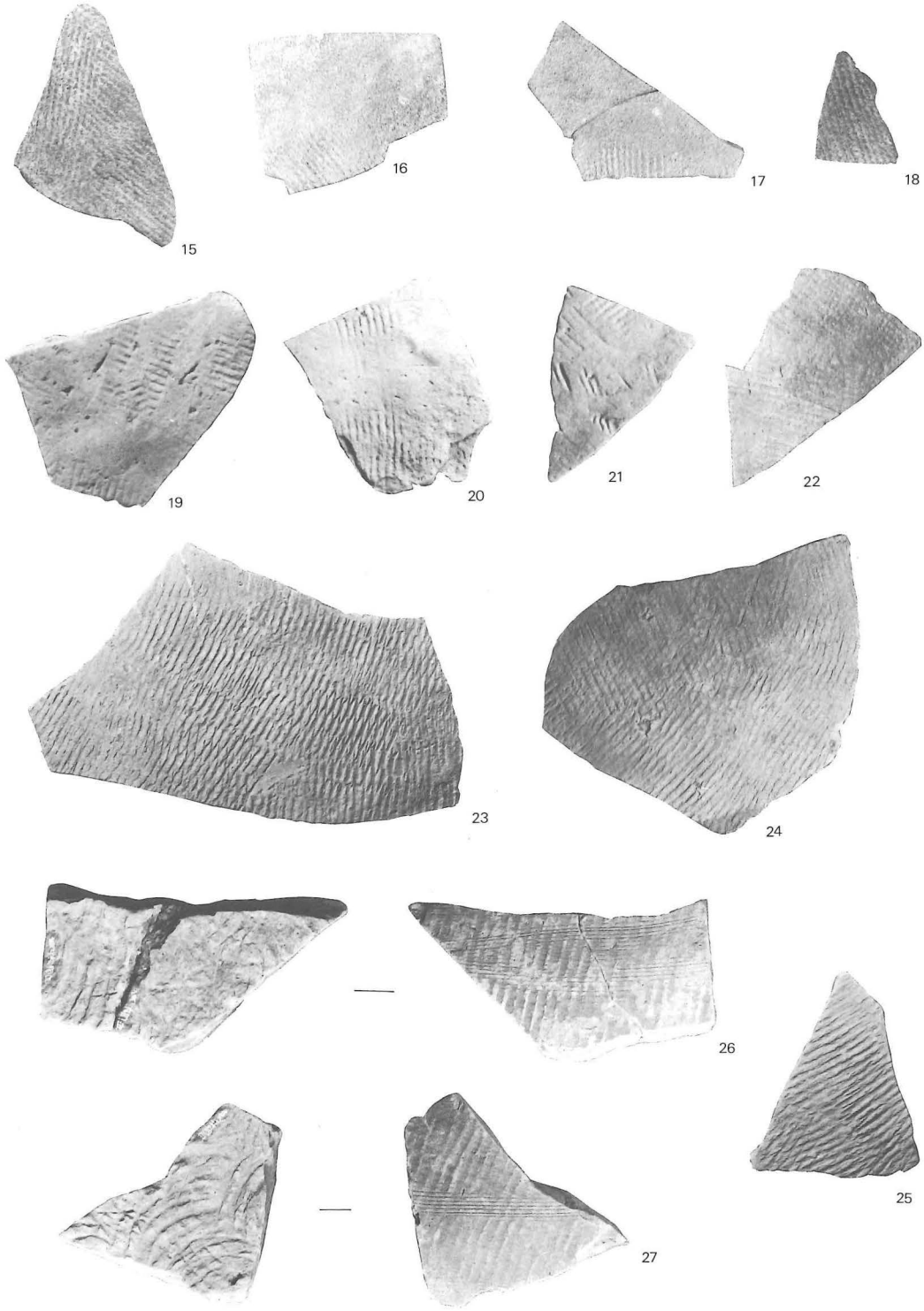
銅剣出土状況

把頭飾出土状況

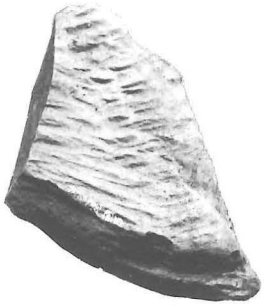
PL. 12 出土土器①

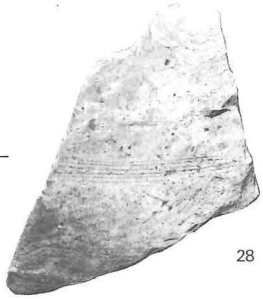


PL. 13 出土土器②

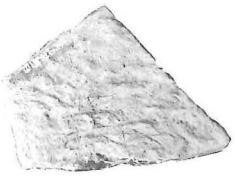


PL. 14 出土土器③

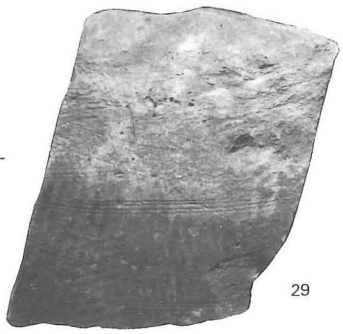




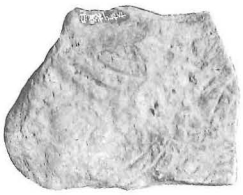
28



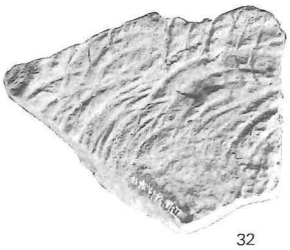
30



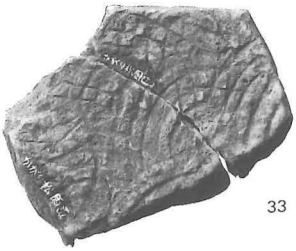
29



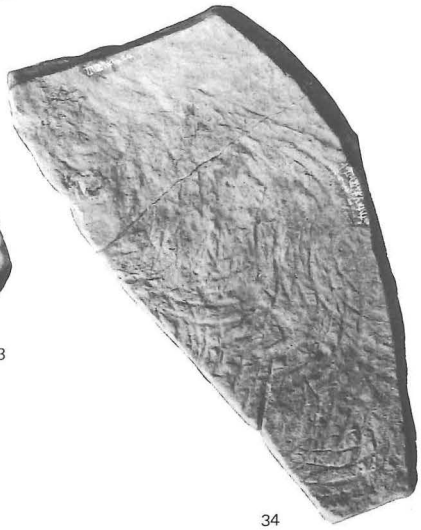
31



32



33



34

あとがき

「所居絶島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑……乘船南北市糴」

対馬の自然と生活を的確に表現して余りある文章として名高いものであるが、実際に島内を通行すると実感として思いあたる。

今回の調査も、久須保の部落から遺跡までは専ら交通手段を船によった。直線にして僅か400mしかすぎないが、急崖が多く、視界も悪く、そして狭隘すぎる小径は歩きにくい事はなはだしく、先の表現を彷彿させるに十分であった。

調査は、時折強風と波浪とによって中断を余儀なくされる事もあったが、波穏やかな日に釜山～下関間を交易する小馬力の韓国船が泰然自若として眼前を往来する様をみていると、古来よりこの地と朝鮮半島との深いかかわりの一端をみる想いであった。

最後に、調査に従事していただいた久須保浦の方々、地主さん、そして町教委の皆様に衷心より御礼を申しあげて結びとしたい。

（高野）

かがり松鼻遺跡

美津島町文化財調査報告書　第3集

1988年3月31日

発　行　長崎県下県郡美津島町教育委員会
長崎県下県郡美津島町大字雞知

印　刷　株式会社 隆　文　社
佐世保市瀬戸越3-4-7

2-1-8